仙台市文化財調査報告書第154集

燕　沢　遺　跡

第4・5・6次発掘調査報告書

1991年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第154集

燕　沢　遺　跡

第4・5・6次発掘調査報告書

１９９１年3月

仙台市教育委員会

序

燕沢遺跡は、古くから縄文土器や古代の瓦が出土するところとして知られており、これまでの調査では、古代の何らかの国家的施設が存在する可能性を秘めた、重要な遺跡であることが報告されております。

燕沢遺跡は、陸奥国分寺や多賀城へ供給するための古代瓦窯跡群が存在する台ノ原・小田原丘陵の先端部に位置し、周辺には千人塚古墳・善応寺横穴古墳群や比丘尼坂・蒙古の碑などが所在し、古代から中世にかけての歴史を物語る地域でもあります。

かっては自然豊かな丘陵地帯であった燕沢遺跡も、現在は都市化が進行し、周辺の遺跡とともに住宅地に囲まれ、かっての風景は失なわれつつあるようです。

今回の報告は、燕沢遺跡の4～6次調査の成果をまとめたものであります。発掘調査から報告書作成の間、ご協力をいただきました地元の皆様に対し、ここに心から感謝の意を表しますとともに、本書が燕沢遺跡、また考古学研究の一助となれば幸いであります。

1991年3月

仙台市教育委員会

教育長　**東海林　恒　英**

例　　言

1．本書は、擁壁工事等に伴う燕沢遺跡の第４・５・６次発掘調査報告書である。

2．本書の作成執筆は、田中則和・佐藤好一・工藤信一郎が担当し、全体の編集は工藤が行った。執筆分担は下記の通りである。

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境　佐藤好一

第Ⅱ章　調査に至る経過　田中則和・工藤信一郎

第Ⅲ章　４次調査　田中則和

第Ⅳ章　５次調査　工藤信一郎

第Ⅴ章　６次調査　田中則和

3．発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の機関・方々に指導・助言・協力を賜った。（順不同・敬称略）

〈機関〉東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所

〈個人〉藤沼邦彦・進藤秋輝・高野芳宏・加藤道雄・丹羽茂

4．本報告書中の土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。

5．本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1：25000「仙台市東北部」を使用した。

6．実測図中の水糸高は標高で示している。

7．実測図中の方位は磁北に統一してある。仙台市において磁北は真北に対して西偏約7°20′である。

8．本書で使用した遺構略号は次の通りである。

SB：建物　SD：溝　SI：竪穴（住居）　SK：土坑（土壙）　P：ピット

9．５・６次調査において、出土した瓦の分類については、これまでの燕沢遺跡発掘調査報告書の分類基準にしたがっているが、ここにあらためて分類基準を掲げておく。

平瓦１類……凸面に格子叩き目がみられる。斜格子１ａ類・正格子１ｂ類・斜格子＋正格子１ｃ類に細分される。

２類……凸面に平行叩き目がみられる。

３類……凸面全体にヘラケズリないしはナデ調整が施される。叩き圧痕は不明。

４類……凸面に縄叩き目がみられる。

５類……凸面に縄叩き目がみられ、ナデ調整により一部叩き目が磨り消される。

丸瓦１類……凸面に格子叩き目がみられる。

２類……凸面に平行叩き目がみられる。

３類……凸面にナデ調整が施される。叩き圧痕は不明。

4類……凸面に縄叩き目がみられる。

10. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真は、仙台市教育委員会文化財課で保管している。

調　査　要　項

遺跡名称　燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号C-101）

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育局社会教育部文化財課調査係

	4　次　調　査	5　次　調　査	6　次　調　査
調　査　地	宮城野区燕沢東三丁目523－1	宮城野区燕沢東三丁目512－1	宮城野区燕沢東三丁目506－1他
担当職員	田中則和	佐藤好一・工藤信一郎	田中則和・工藤信一郎
調査期間	1989年11月8日（試掘調査） 〃　11月29日～12月9日	1990年8月30日～9月18日	1990年12月5日～12月11日
開発面積	2,299 m²	948 m²	1,137 m²
調査面積	338 m²	300 m²	105 m²
原　因　者	有限会社丸三ビル	株式会社台の原不動産	山田清一
調査協力	株式会社東洋開発コンサルタント	株式会社東洋開発コンサルタント	株式会社日東建設 株式会社青野測量設計
参　加　者	有限会社太伸興業	佐々木　匡　横田　正治 熊谷　友治　加藤　　久 佐藤　　久　村山よし子 田中つや子　斉藤　慶子 小泉　幸子　本間　春美 高橋　喜子　塩野　礼子 掘篭　幸子　筒井　尚美 昆　　イヨ　須藤　敬子	佐々木　匡　横田　正治 熊谷　友治　加藤　　久 佐藤　　久　相沢美佐子 斉藤　慶子

本　文　目　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境……1
　1．地理的環境……1
　2．歴史的環境……1
Ⅱ．調査に至る経過……1
　1．4次調査……1　2．5次調査……3　3．6次調査……3
Ⅲ．4次調査……5
　1．調査方法……5
　2．基本層序……5
　3．検出遺構と遺物……6
　(1) SI1 竪穴住居跡 ……6　(2) SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡 ……8
　(3) ピット群…14
　①第1柱穴列 ……14　②第2柱穴列 ……14　③第3柱穴列 ……14
　(4) 溝状遺構 ……14
　① SD1 溝状遺構 ……14　② SD2 溝状遺構 ……15
Ⅳ．5次調査 ……16
　1．調査方法 ……16
　2．基本層序 ……16
　3．検出遺構と遺物 ……18
　(1) 竪穴住居跡 ……18
　① SI1 竪穴住居跡 ……19　② SI2 竪穴住居跡 ……19
　(2) 土坑 ……20
　① SK1 土坑 ……20　② SK2 土坑 ……23　③ SK3 土坑 ……24
　④ SK4 土坑 ……24　⑤ SK5 土坑 ……24
　(3) 溝・溝状遺構 ……24
　(4) ピット群 ……25
　(5) 階段状段差 ……25
　4．遺構外の出土遺物・瓦 ……25
　5．出土遺物（土師器）について ……27
Ⅴ．6次調査 ……28
　1．調査方法 ……28

2．基本層序 ……28
3．検出遺構と遺物 ……28
(1) SD1 溝状遺構 ……29
(2) SK1 土坑 ……31
(3) SK2 土坑 ……32
(4) ピット ……33
(5) 焼面と竪穴住居跡の可能性 ……33
VI. 4～6次調査の考察とまとめ ……33

挿 図 目 次

図1 燕沢遺跡と周辺の遺跡……2
図2 調査区位置図……4
図3 4次調査トレンチ配置図……5
図4 第3・4トレンチ遺構配置図……6
図5 SI1 竪穴住居跡出土遺物……7
図6 SI1 竪穴住居跡……7
図7 SI1 竪穴住居跡埋設瓦……9
図8 SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡……10
図9 SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡出土瓦(1)……11
図10 SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡出土瓦(2)・土器……12
図11 SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡出土瓦(3)……13
図12 基本層序（5次調査）……16
図13 5次調査遺構配置図……17
図14 SI1 竪穴住居跡・出土遺物……18
図15 SI2 竪穴住居跡……19
図16 SK1 土坑……20
図17 SK1 土坑出土遺物……21
図18 SK1 土坑出土瓦……22
図19 SK2 土坑・出土遺物……23
図20 SK3 土坑……24
図21 SK4・5 土坑……24
図22 SD2 溝出土瓦・SD5 溝出土遺物……25
図23 遺構外出土瓦……26
図24 6次調査遺構配置図……29
図25 SK1 土坑出土・土玉……30
図26 SD1 溝状遺構・SK1 土坑・ピット（I区）…30
図27 SD1 溝他出土瓦……31
図28 SK2 土坑……31
図29 SD2 溝出土遺物……32
図30 その他の遺構……32

表 目 次

第1表 燕沢遺跡次数別調査成果一覧表……3
第2表 4次調査出土瓦観察表……15
第3表 5次調査溝・溝状遺構観察表……25
第4表 6次調査溝状遺構観察表……33

写　真　目　次

写真－1　燕沢遺跡航空写真（昭和36年）……38
写真－2　燕沢遺跡航空写真（平成2年）
写真－3　4次調査区遠景（調査前状況）……39
写真－4　4次調査区近景（調査前状況）
写真－5　SI1 竪穴住居跡
写真－6　SI1 竪穴住居跡瓦埋設部　……40
写真－7　SI1 竪穴住居跡完掘状況
写真－8　SI1 竪穴住居内土師器甕埋設部
写真－9　SI1 竪穴住居跡・煙道　……41
写真－10　SI1 作業風景
写真－11　SB1 掘立柱建物跡・SX1 平場
写真－12　SB1 掘立柱建物跡
写真－13　SB1 掘立柱建物跡　……42
写真－14　SX1 平場瓦出土状況
写真－15　SX1 平場柱穴
写真－16　4次調査 SI1 竪穴住居跡埋設瓦　……43
写真－17　SI1 竪穴住居跡埋設瓦・SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡出土瓦　……44
写真－18　SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡出土瓦　…45
写真－19　4次調査出土遺物土師器・鉄製品　……46
写真－20　5次調査区遠景（南西から）……47
写真－21　調査区全景（東から）
写真－22　調査区全景（西から）
写真－23　SI1 竪穴住居跡　……48
写真－24　SI2 竪穴住居跡
写真－25　SK1 土坑土師器坏出土状況
写真－26　SK1 土坑完掘状況　……49
写真－27　SK2 土坑
写真－28　SK2 土坑土師器坏出土状況
写真－29　SK1 土坑出土瓦　……50
写真－30　5次調査遺構外出土瓦　……51
写真－31　SK1 土坑出土遺物　……52
写真－32　5・6次調査出土遺物　……53
写真－33　6次調査 SD1 溝・ピット検出状況　……54
写真－34　SD1 溝・ピット完掘状況
写真－35　竪穴住居跡

Ⅰ．遺跡の位置と環境

１．地理的環境

燕沢遺跡は、東北本線東仙台駅の北東約２kmの地点、仙台市宮城野区燕沢東三丁目・同区岩切字山崎西に所在する。

遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山脈から東に分岐する富谷・七北田丘陵（仙台市北部では台原・小田原丘陵の呼称がある）の間を七北田川が東流し、太平洋に注いでいる。七北田川の上・中流域の両岸には河岸段丘や自然堤防・後背湿地が発達している。

本遺跡は、台原・小田原丘陵の東端部、七北田川右岸の標高20～30ｍ程の河岸段丘上に立地している。沖積地との比高差は10～20ｍ程ある。

２．歴史的環境

燕沢遺跡周辺には、数多くの遺跡が分布している。特に七北田川両岸の段丘上や自然堤防上に集中している。

縄文時代・弥生時代の遺跡については不明な点が多いが、古墳時代以降には数多く形成されるようになる。自然堤防上には鴻ノ巣遺跡・岩切畑中遺跡・新田遺跡のような集落が営まれ、丘陵部には千人塚古墳や、善応寺・東光寺・入生沢・台屋敷の横穴墓群が造営される。また遺跡の南西約２kmにある大蓮寺窯跡では初期須恵器の生産が行なわれている。

奈良時代になると当遺跡の東北東約５kmに多賀城が、つづいて南南西約５kmに陸奥国分寺・同尼寺が建立される。これらに供給される瓦・須恵器等の生産が台ノ原・小田原丘陵上で開始され、県内でも有数の古代窯業地帯となった。本遺跡は、戦前石田茂作氏によって燕沢寺として紹介され、その後古代の寺院や官衙としての性格について論じられてきている。

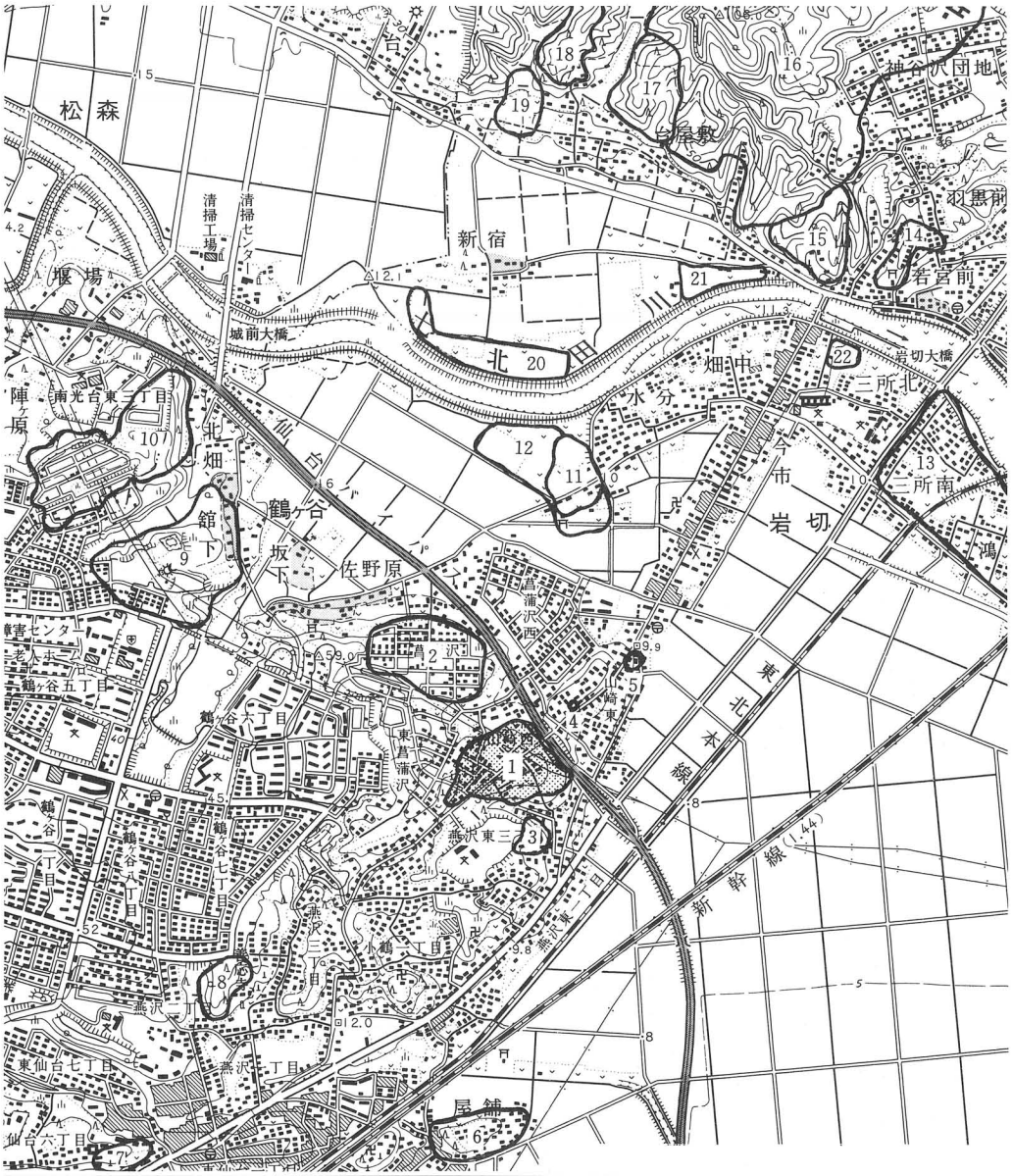
中世には七北田川左岸丘陵上に岩切城が留守氏によって築かれ、麓の留守氏菩提寺である東光寺には磨崖仏や多数の板碑が造立された。その他周辺には笹森城跡、小鶴城跡などの館跡がいくつかある。留守文書からもこの周辺が中世の中心地であったことがうかがわれる。

Ⅱ．調査に至る経過

１．４次調査

平成元年10月２日付で有限会社丸三ビル代表取締役鈴木竹治氏より燕沢遺跡の発掘届が提出された。開発内容は宅地造成であり盛土主体の工事であるが、擁壁設置区域については遺跡破壊の恐れがあると判断された。

当該地の現状は近年の造成による高さ70cm前後の段が東西方向に形成されており、遺跡が



No	遺跡名	種別	立地	時代	No	遺跡名	種別	立地	時代
1	燕沢遺跡	寺院？集落	丘陵	縄文～平安	12	岩切畑中遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安
2	菖蒲沢遺跡	散布地	丘陵	平安	13	鴻ノ巣遺跡	散布地	自然堤防	古墳・平安・中世
3	吉沢遺跡	散布地	丘陵	平安	14	若宮前遺跡	散布地	丘陵	縄文～平安・中近世
4	千人塚古墳	円墳	丘陵斜面	古墳	15	東光寺横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
5	山崎囲遺跡	散布地	丘陵	縄文	16	岩切城跡	城館	丘陵	中世
6	小鶴城跡	城館	丘陵	中世	17	台屋敷横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
7	大蓮寺窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳・奈良	18	入生沢横穴群	横穴墓	丘陵	古墳～平安
8	善応寺横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳～平安	19	入生沢遺跡	散布地	丘陵麓	平安
9	笹森城跡	城館	丘陵	中世	20	大正囲遺跡	散布地	自然堤防	平安
10	北畑遺跡	集落塚	丘陵山林	縄文～平安	21	新宿囲遺跡	散布地	自然堤防	平安
11	稲荷館跡	城館	自然堤防	中世	22	今市遺跡	散布地	自然堤防	平安・中世

図１　燕沢遺跡と周辺の遺跡

すでに相当、損壊されている可能性が認められた。このため平成元年11月8日に確認調査を実施した。その結果、柱穴を含むピット10個、溝状遺構2基、性格不明遺構1基を確認し、本調査を実施することとした。

2．第5次調査

本遺跡内の仙台市宮城野区燕沢東3丁目512－1番地内において宅地造成が計画され、平成元年6月8日付で台の原不動産株式会社から発掘届が提出された。申請地は第4次調査地点に隣接し、竪穴住居等の遺構の存在が予想されたため、平成2年8月27日～9月18日まで、記録保存を目的とした発掘調査を実施するに至った。

3．6次調査

平成元年11月16日付仙台市宮城野区岩切1丁目7番13号山田清一氏より燕沢遺跡の発掘届が提出された。開発内容は宅地造成であり、申請者との協議を経て盛土主体の工事となった。しかし車乗入口及び市道拡幅部については掘削はまぬがれず、遺構が破壊される恐れがあると判断された。このため発掘調査を実施することとした。

第Ⅰ表　燕沢遺跡次数別調査成果一覧表

調査次数(調査年)	遺構時期	検出遺構	出土遺物	文献
1934		「燕澤寺」の名称	燕澤寺自体の説明はないが、奈良時代の寺院跡としての性格づけ	1
1950・1970		「燕澤古瓦出土地」	重弁蓮華文軒丸瓦・土師器(平安時代初期)。遺跡の性格は不明としているが、国家的施設の存在を示唆。	2
第1次（1977）	平安時代	掘立柱建物跡（3棟） 掘立柱跡（1基）。土坑（4基）。 溝(5条)。溝状遺構(1基)。 ピット（130基）	土師器（塩竈式・古墳時代・表杉ノ入式）、須恵器（10c代） 灰釉陶器（黒笹14号窯式。11c前後）。平瓦（1～4類）。丸瓦（2～4類）。 石製品（石包丁・石錐？等）。鉄製品（刀子）。鉄鋅	3
第2次（1982）	弥生時代 古墳時代 平安時代 不明	土坑（1基） 住居跡(4軒)。掘立柱建物跡（1棟）。 住居跡(8軒)。掘立柱建物跡(4棟)。方形周溝遺構(1基)。 土坑（8基）。 溝(8条)。溝状遺構。ピット。道跡？	縄文土器（大木2a・3・6）。弥生土器（枡形囲）。土師器（塩竈式・表杉ノ入式）。赤焼土器。須恵器。陶硯。緑釉陶器。石器（石鏃・剝片・石斧・敲石）。砥石。鉄製品（釘等） 漆紙文書「□ 婦 □ ⊏」 石カ 穴カ 合カ 軒平瓦（陽刻の均整唐草文軒平瓦）。平瓦（1～5類）。軒丸瓦。丸瓦（1～4類）	4
第3次（1987）	縄文時代 弥生時代 古墳時代～平安時代 平安時代	土坑（1基） 竪穴遺構（1基） 墓壙（1基） 住居跡（2軒）。溝（2条）。溝状遺構(1基)。掘立柱跡（6棟）。 ピット(20基)。性格不明遺構（1基）	縄文土器（早期末～前期）。弥生土器（十三塚式・枡形囲式・天王山式）。 土師器（表杉ノ入式）。須恵器。石器（石鏃・石匙・スクレイパー・石錐・石斧・不定形石器・敲石・磨石・石皿）。鉄製品（鎚）。銅製品。土製品（有孔円板状等）。軒平瓦（ロクロびき重弧文・均整唐草文）。平瓦（1～5類） 軒丸瓦（宝相華文・歯車文・変形蓮華文）。丸瓦（2～4類）	5

文献 1．石田茂作「仏教の初期文化」岩波講座「日本歴史」1934

2．伊東信雄「燕澤古瓦出土地」「仙台市史3」1950

〃　「燕沢古瓦出土遺跡」「仙台の文化財」宝文堂1970

3．仙台市教育委員会　第39集　燕沢遺跡（宅地造成）

4．仙台市教育委員会　第62集　燕沢遺跡（仙台市山崎東土地区画整理事業）

5．仙台市教育委員会　第116集　燕沢遺跡（擁壁工事）

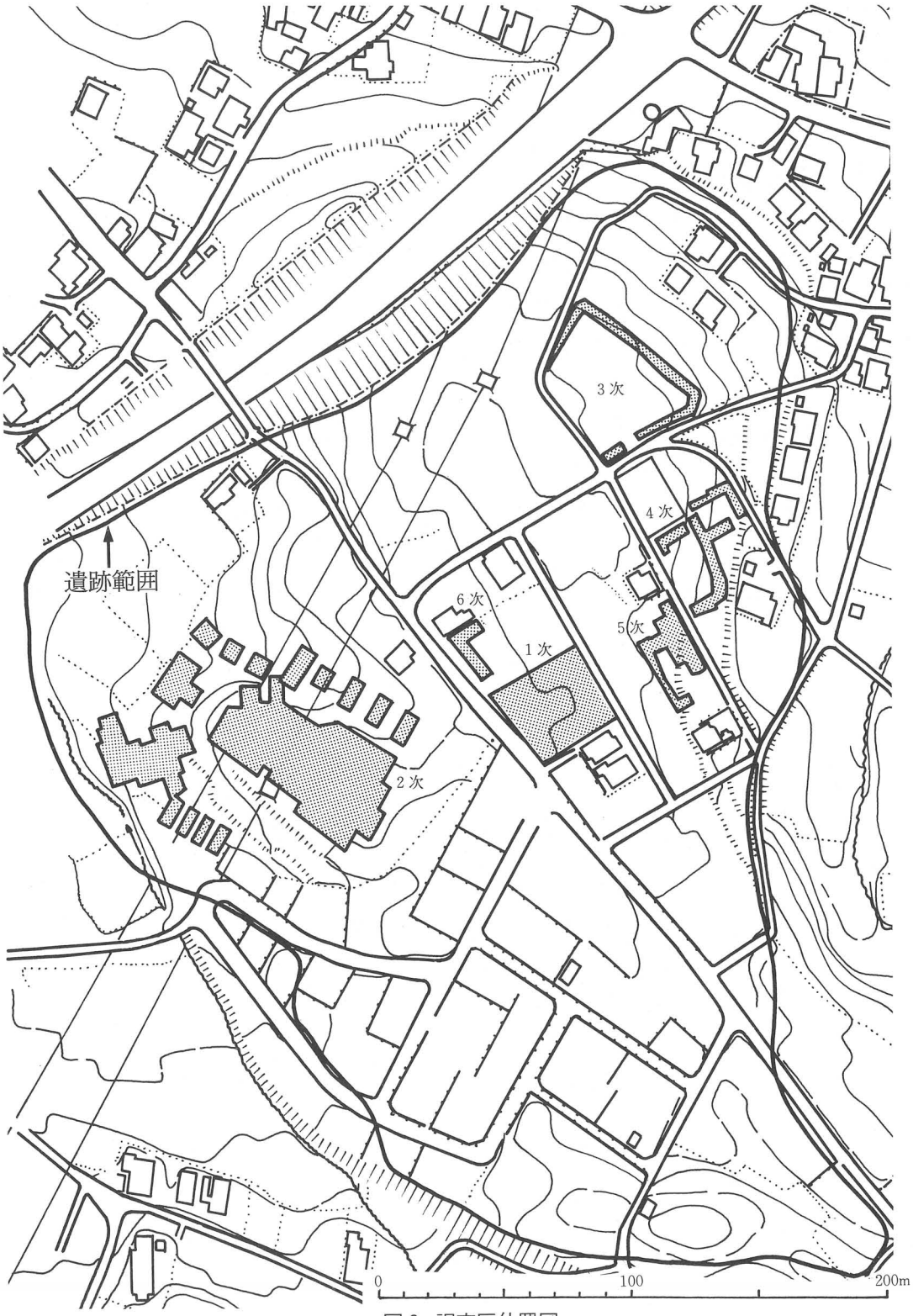


図２　調査区位置図

Ⅲ．４次調査

１．調査方法

遺構の破壊が予想される擁壁設置域に幅約3.5ｍのトレンチを設定した。測量は平板測量によった。

２．基本層序

調査地は沢に面する南斜面に位置する。現在の標高は22～30ｍである。下方の平坦地（元来は沢地）の標高は16～18ｍである。調査区位置での等高線に直交した断面での傾斜角は15°前後である。調査区最下部を除く大部分の土層は表土（畠の耕作土）の直下が遺構確認面である黄褐色シルト質粘土層となっている。前述の段形成の他に耕作などによる全体的な削平を受けていると思われる。調査区最下部で検出された段切りによる平場であるSX1平場付近にはその堆積土の上層に第２層、黒褐色シルト層が形成されている。以下、層相について述べる。

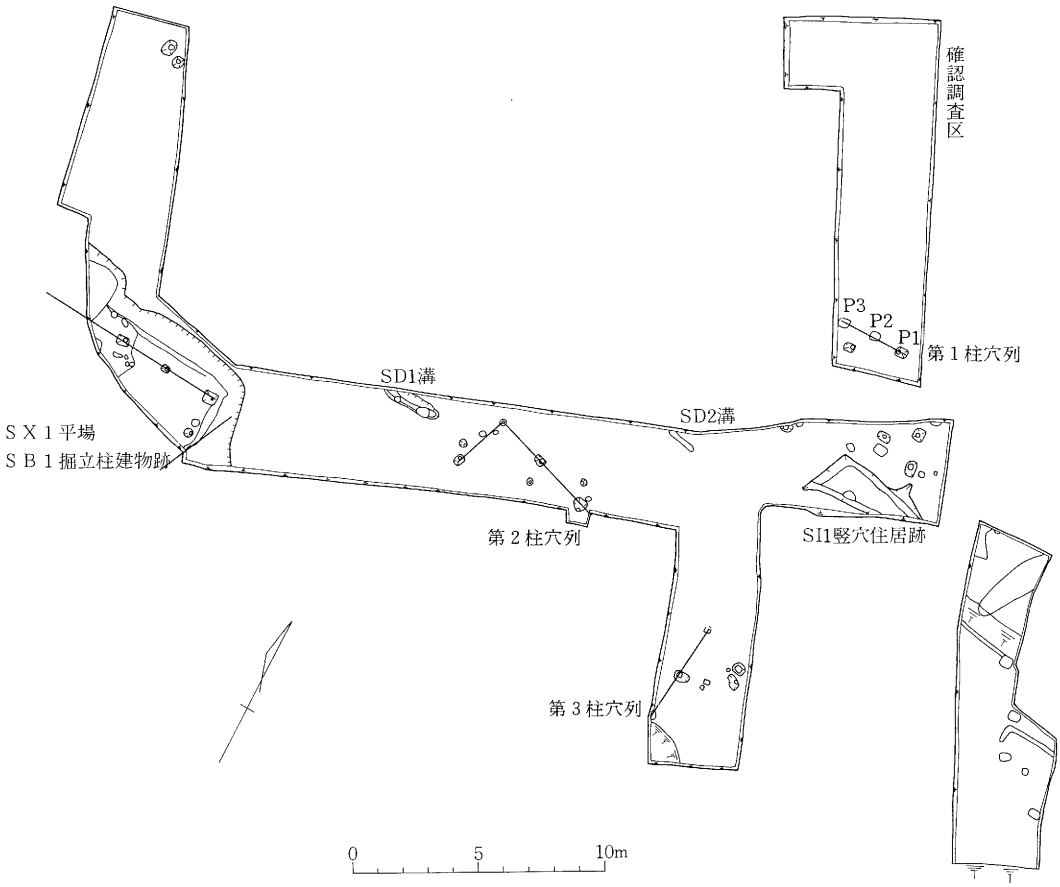


図３　４次調査トレンチ配置図

第１層は暗褐色（10 YR3/4）シルトで表土であり、畠の耕作土である１a 層と斜面下部に分布し第３層に由来すると思われる凝灰岩ブロック（数 mm 単位）を霜ふり状に含む１b 層に分けられる。層厚は 10～60 cm で斜面の下方ほどその厚さを増す。第２層は黒褐色（10 YR3/2）シルトで前述のように SX1 平場付近に分布する。層厚は 10～15 cm である。第３層は凝灰岩ブロックを多く含む黄褐色（10 YR5/6）シルト質粘土。第１・２層に比して硬質でその上面は全遺構の確認面である。

３．検出遺構と遺物

検出された遺構築は竪穴住居跡１件（SI1）、段切りされた平場１ケ所（SX1）と、その平場に建つ掘立柱建物跡１棟（SB1）、ピット 22 個（P1～P22）である。ピットの中で「掘り方」と「柱穴」が区別されるもの（９個）については掘立柱建物跡もしくは区画施設を構成すると考えられる。

(1)　SI1 竪穴住居跡

第４トレンチ１区で竪穴住居跡の北半を検出した。住居跡の南西部は既造成工事による削平で破壊されている。平面形は方形を基調とし、その規模は北辺 3.9 m 以上、西辺 2.9 m 以上、面積は 11 m²以上を測る。他遺構との重複はない。煙道方向を軸線とした場合の方向は N-19°-

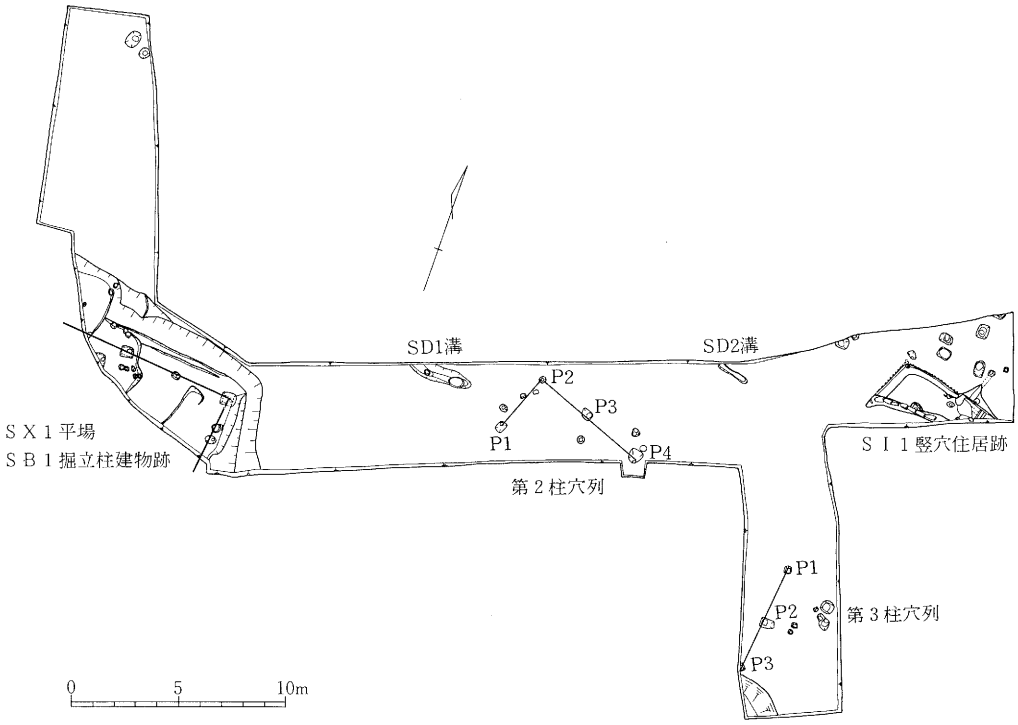
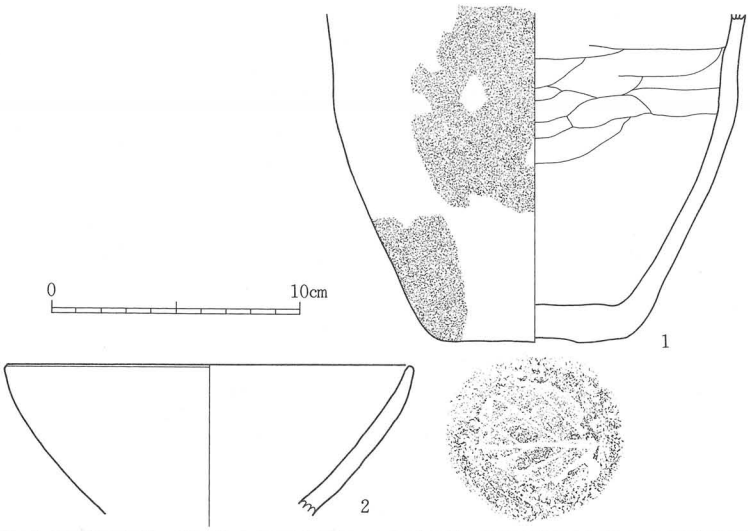
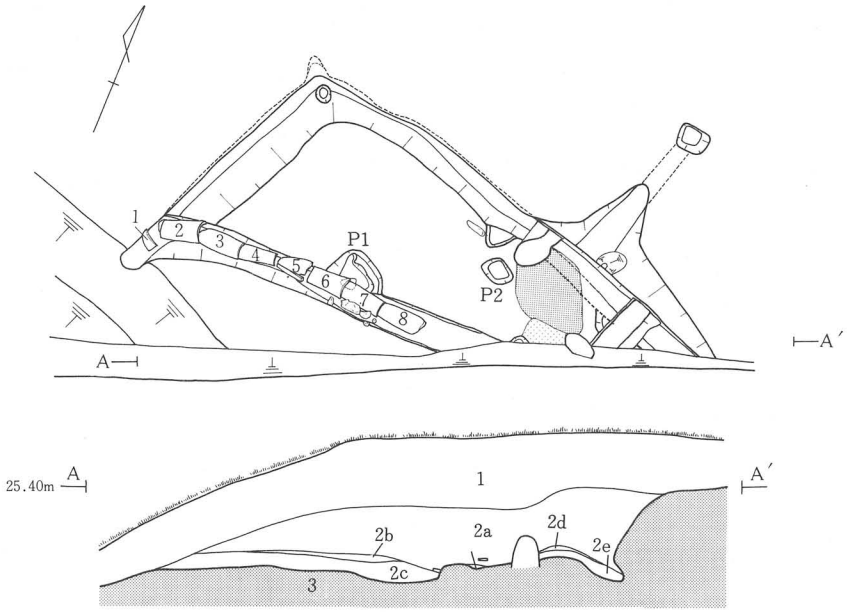


図４　第３・４トレンチ遺構配置図



図・番号	種　別	器　種	層　位	外 面 調 整	内面調整	口径	器高	底径	遺　存	備　　考	写真番号
5－1	土師器	甕	同溝(カマド下)堆積土	体部：縦位ナデ 底部：木葉痕→周縁ナデ	横斜位ナデ	－	－	66	体底部½	体部と黒褐色の付着物	19－1
5－2	土師器	椀 or 坏	〃	剝落不明	ミガキ→黒色処理				口縁部片		－

図5　ＳＩ１竪穴住居跡出土遺物



Ｉ号住居跡土層注記表

	層No	土　色	土　性	備　　考
基 本 層 序	1	暗褐色10YR3/4	シルト	畑耕作土
	2a	暗褐色10YK3/3	シルト	数 mm～5 cm の淡黄～灰色の凝灰岩（地山に由来）ブロックを多く含む
住居跡堆積土	2b	暗褐色10YR3/3	シルト	炭化物層が焼土含む 数 mm～5 cm の淡黄～灰色の凝灰岩（地山に由来）ブロックを多く含む
	2c	暗褐色10YR3/3	シルト	2a 層に類似し2b 層で分けられる。 数 mm～5 cm の淡黄～灰色の凝灰岩（地山に由来）ブロックを多く含む
	2d	淡黄色2.5Y8/3	いわゆる粘土 白色粘土	カマド炭化土か
	2e	褐色10YR4/4	シルト	焼土炭化物を少量含む
	3	黄褐色10YR5/6	シルト質粘土	凝灰岩ブロックを多く含む

図6　ＳＩ１竪穴住居跡

Eである。堆積土は暗褐色シルトで5層に細分される(図6)。壁は下半部で急激に立ち上がり、遺存が良好なところでの壁高は約58 cmを計る。周溝は壁直下で検出された。上端幅20〜40 cm、下端幅10〜15 cmを計る。底辺が壁下端より外側に2〜7 cmほどくいこんでいるのが特徴である。床面は基本層序の第3層を床面としている。又、堆積土最下層である1c層上面に埋設瓦をおおって焼土を含む炭化物層(厚さ1〜6 mm)がおおっているので、この層の上面がレベルからみても最終の床面と考えられる。カマドは北辺に設置され、カマドの両袖部がわずかに遺存していた。袖部は白色粘土で構築されており東側袖部先端には赤褐色に焼けた凝灰岩(長さ26 cm、幅14 cm)が遺存していた。西側袖部先端のP2は同一の性格の石のすえ方痕の可能性がある。東西袖部の間には焼土が分布しており、その南側には炭化物層がみられた。この焼土をはがすと土師器甕一個体(体部)分の破片が敷かれていた。

P1は明瞭な柱穴痕を検出できなかったが、その位置・形状などから柱穴(抜き取り痕か)の可能性がある。瓦埋設溝状遺構との切合いは認められなかった。

施設としては瓦埋設溝状遺構(暗渠状遺構)がある。床面の東西方向に丸瓦(8個)が凸部を上にして埋設されていた。すえ方は幅約25 cm、深さ16〜20 cmの溝状を呈している。トレンチ南壁に丸瓦が確認され更に東方に延びる様相を示している。溝状遺構は西側に傾斜している事などから用途としては排水施設と考えられる。遺物は上記の他、カマド下部周溝堆積土より土師器甕1個体と土師器埦もしくは坏の細片が出土している。

(2) SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡

第3トレンチ南端と第4トレンチ西端で確認し、両トレンチを拡張・接続して検出した。

SX1 平場

南西方向への斜面を段切りして平場を造りだしている。斜面との関係で東西に長い平場と考えられる。上端の平面形は台形に開いているが下端の平面形のコーナーはほぼ直交している。規模は東西8.2 m以上、南北3.6 m以上である。平場の北東部が遺存している他、斜面下方の調査区外は近年の削平で破壊されている。段切りした壁の高さは、60〜115 cmで傾斜角は45度前後である。

堆積土は暗褐色10 YR3/4で傾斜面の延長線上に堆積している。底面の北縁に沿って周溝が検出された。底面には段差によって3つの平坦面が形成されており、西方へ平坦面が低くなり、東からA・B・C面とし記述する。A面の北辺には周溝が設けられ、北東コーナーは隅丸方形を呈している。B面は周溝の連続性を切るかのように造りだされている。A面より低く、その段差は14〜23 cmである。C面はA面より斜面側に約1.2 mくいこんでいる。B面より低く、その段差は2〜12 cmである。

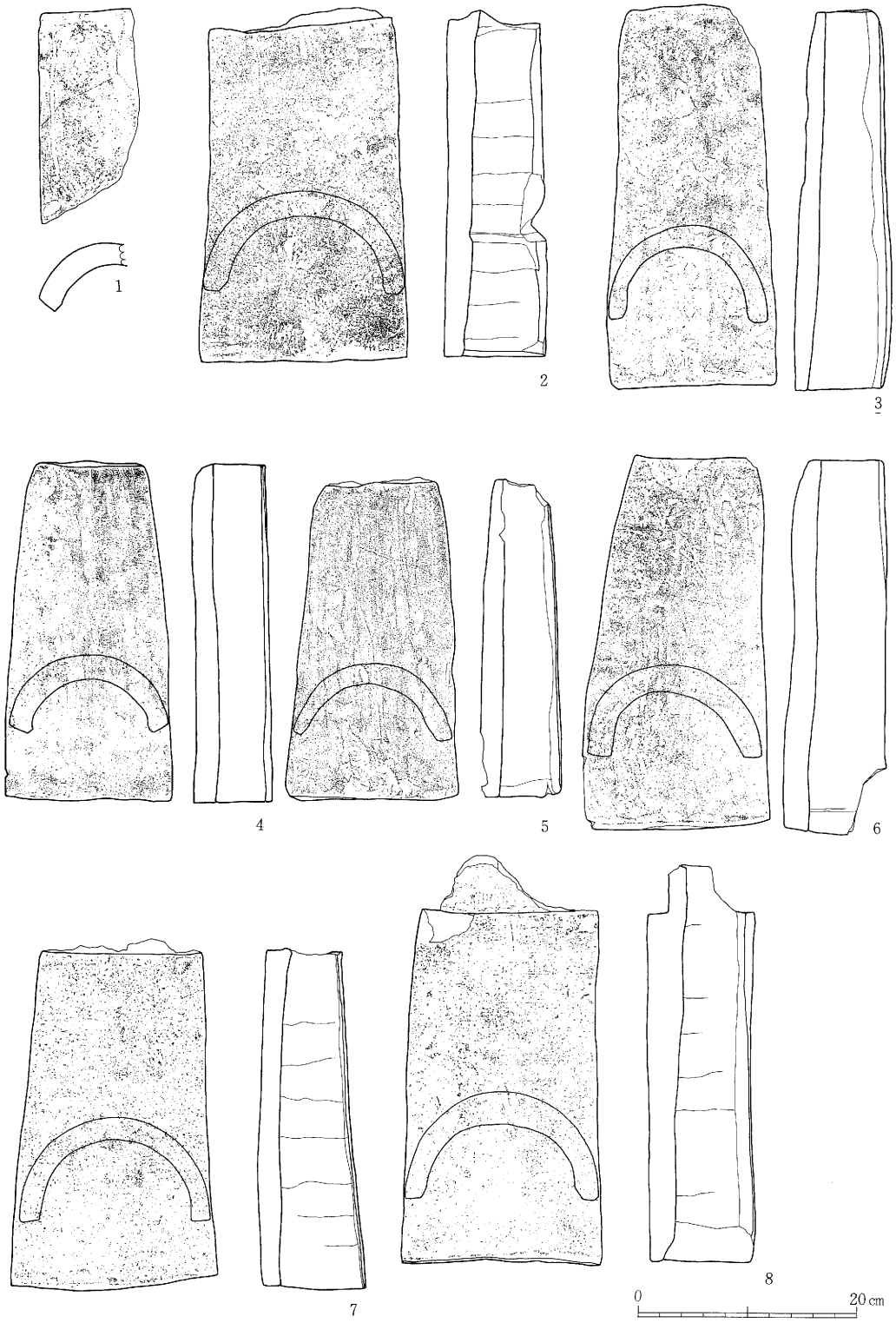
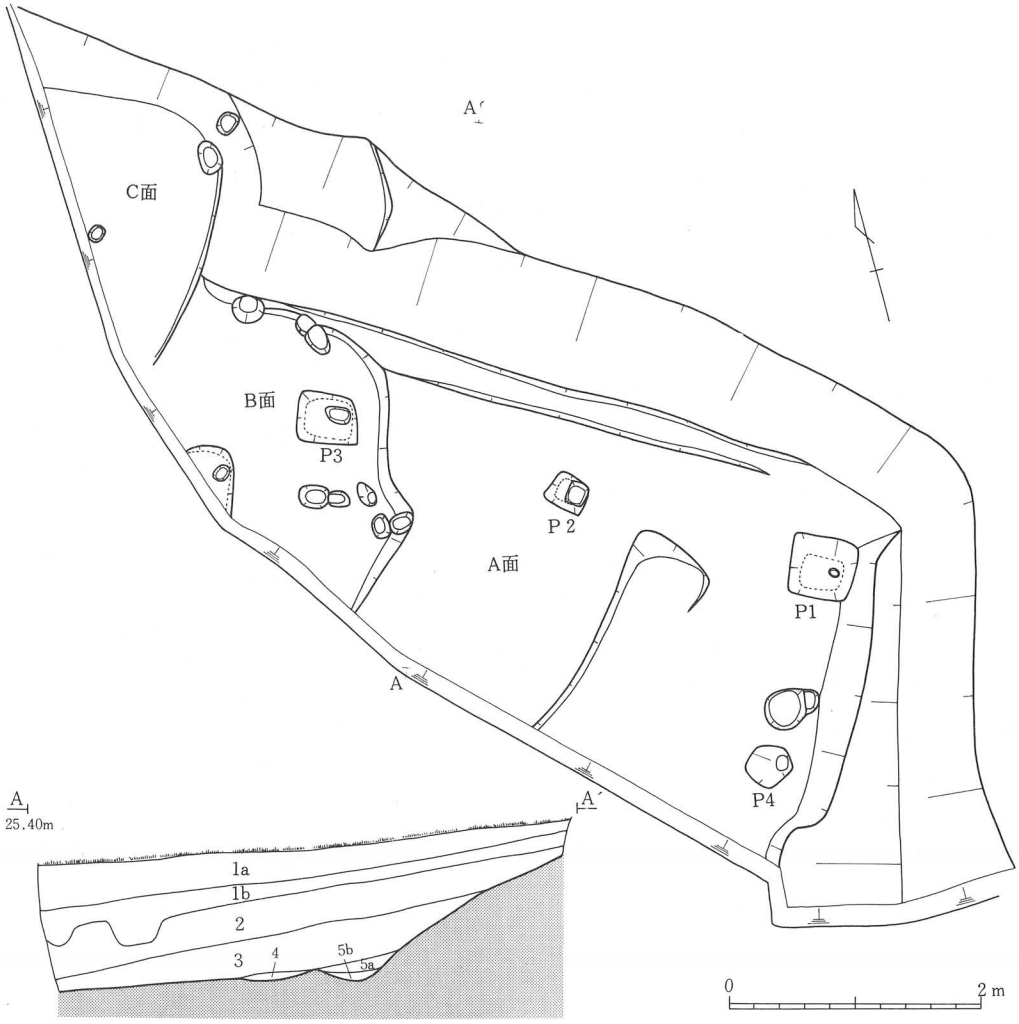


図7　ＳＩ１竪穴住居跡埋設瓦

SBI 掘立柱建物跡

SX1 平場内より 13 個のピットが検出された。この内、掘り方と柱穴痕の区別のつくピットは 5 個あり、4 個のピットが SB1 建物を構成する。調査時は南北 1 間もしくは 1 間以上、東西 2 間の掘立柱建物跡と捉えた。しかし調査後、削平が擁壁設置域を越えてなされてしまい、緊急の調査を行った際、P1 と P3 の延長線上約 8.4 m の地点で柱穴痕のあるピット及びこれに直交



土層注記表

	層 No	土　色	土　性	備　　考
基本層序	1a	褐色10YR4/4	シルト	表土 畑耕作土
	1b	褐色10YR4/4	シルト	表土　地山ブロック入る
	2	黒褐色10YR3/2	シルト	土師器・須恵器・瓦片を含む。地山ブロック数 mm～1 cm 含む
	3	暗褐色10YR3/4	シルト	
遺構堆積土	4	暗褐色10YR3/4	シルト	風化礫ブロック数 mm～数 cm 含む
	5a	暗褐色10YR3/3	シルト	3 層に似　やや暗い
	5b	にぶい黄褐色10YR4/3	砂質シルト	周溝堆積土

図 8　ＳＸ１平場・ＳＢＩ掘立柱建物跡

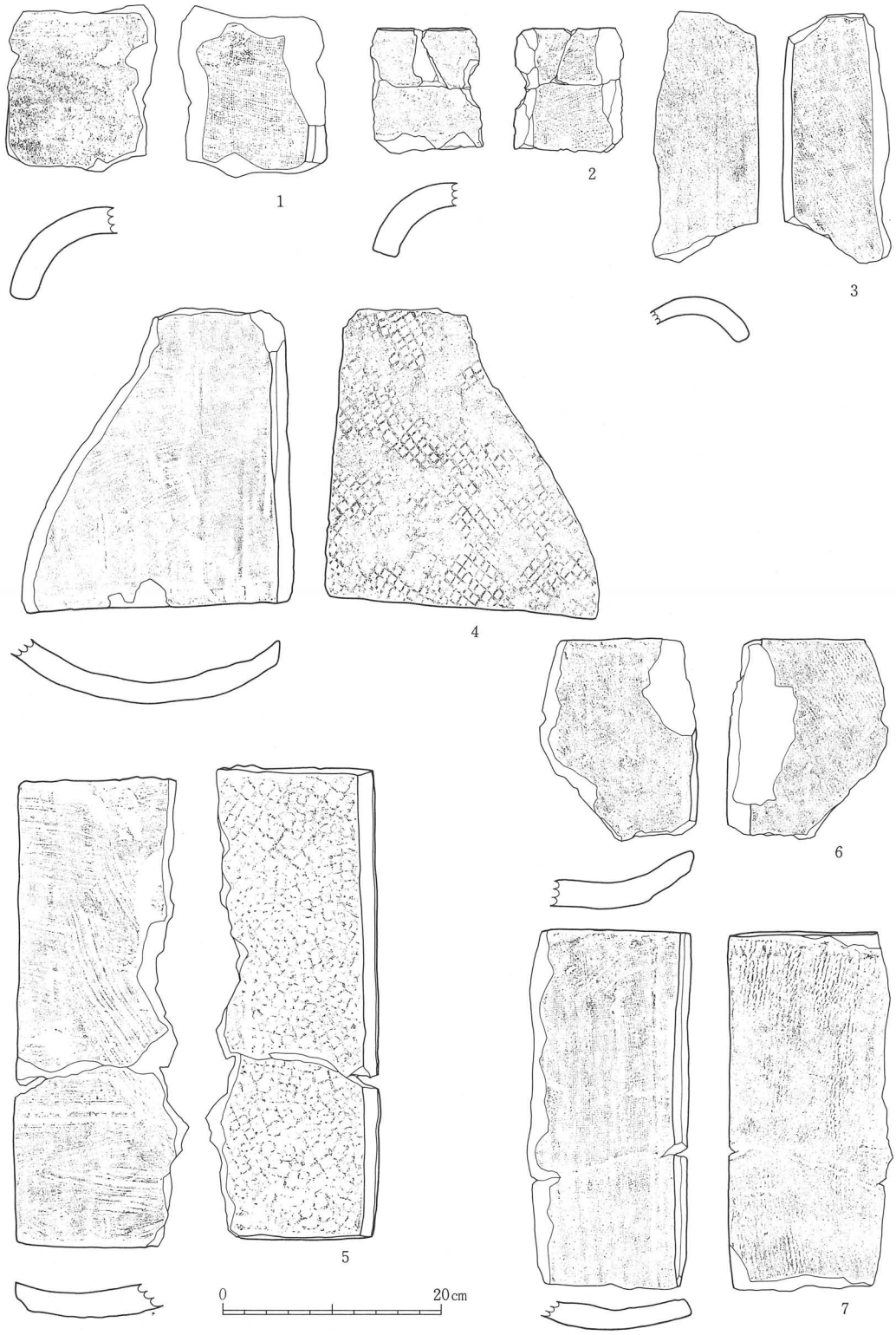
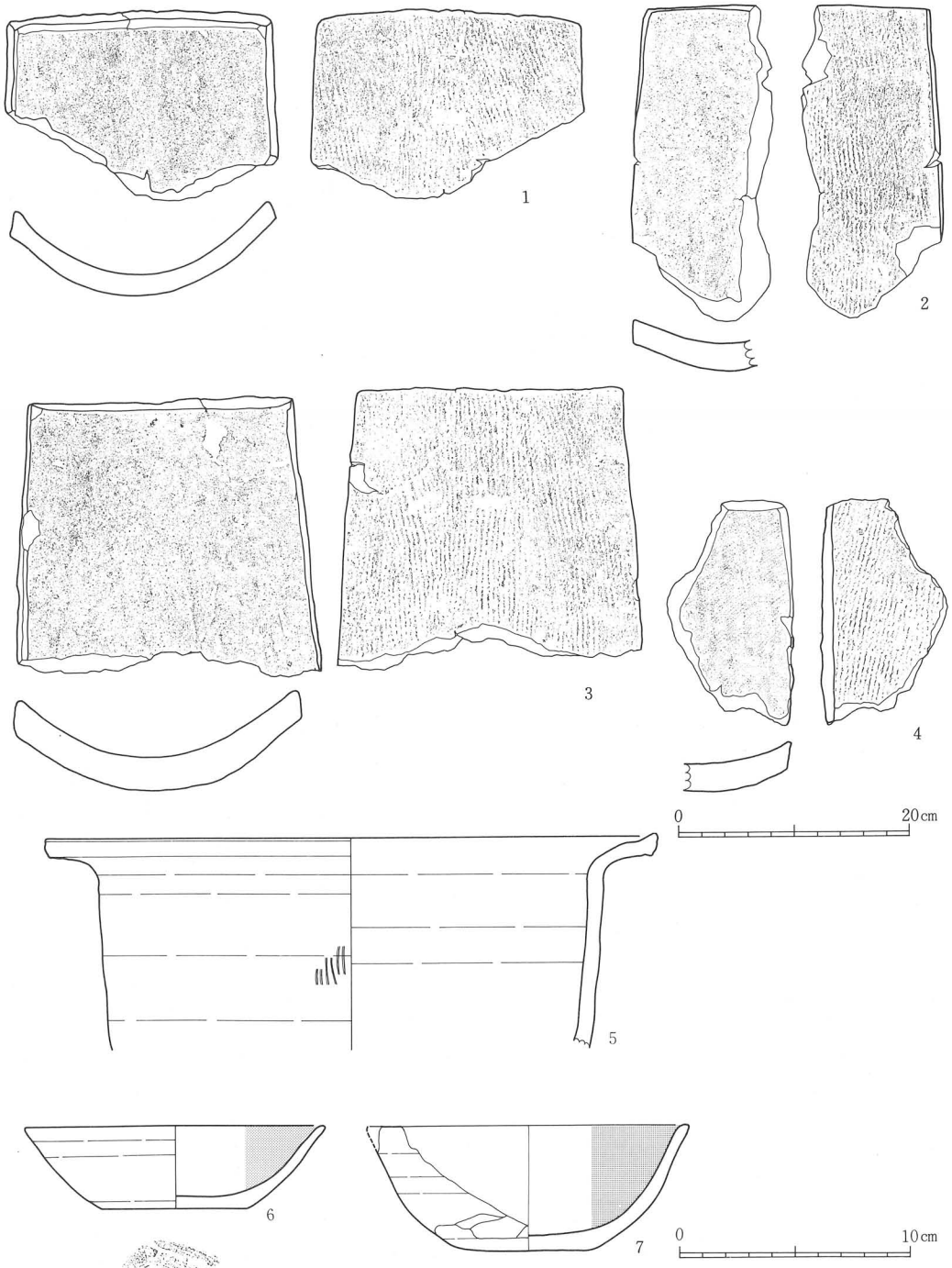


図9　ＳＸＩ平場・ＳＢＩ掘立柱建物跡出土瓦（1）



図・番号	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	遺存	備考	写真番号
10－5	土師器	甕	P1堆積土	縦位叩き目→ロクロ	ロクロ	26.5	－	－	口縁部片		19－4
10－6	土師器	杯	3層下部	ロクロ	ミガキ(2次加熱で黒色消失)	13.5	3.6	6.3	ほぼ完形		19－3
10－7	土師器	杯	3層	ロクロ 下端を横位手持ケズリ	ミガキ（黒色処理）	14.0	5.4	5.5	口縁部片		19－2

図10　ＳＸＩ平場・ＳＢＩ掘立柱建物跡出土瓦（２）・土器

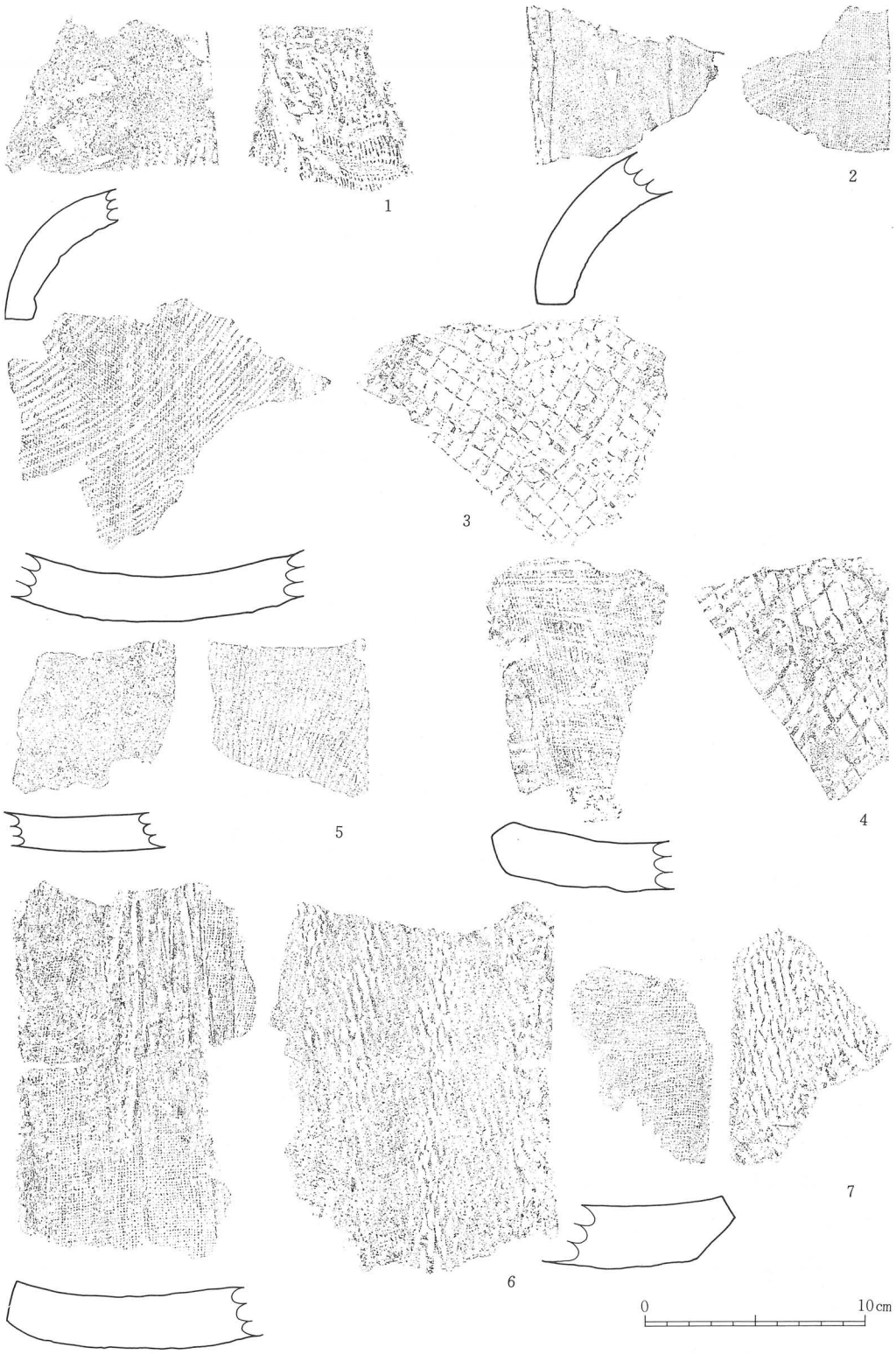


図11　ＳＸＩ平場・ＳＢＩ掘立柱建物跡出土瓦（３）

するピットが検出された。P1 と P16・17 は直交し、P1 と P4 の間隔に P16 と P17 の間隔がほぼ等しいので一体の建物跡と考えられる。したがって東西 4 間、南北 1 間もしくは 1 間以上の建物跡であった可能性がある。この場合、桁行総長は約 8.35 m(P1－P3 間　4.15 m)、柱間は東より 2.15 m、2.0 m、約 4.2 m(2 間分)である。梁行は東妻で 1.55 cm、西妻で 1.65 cm を計る。梁行を軸線とした場合、N－5°－E である。柱穴の平面形は長方形を基調とする。P1～P3 の長軸は桁行方向と一致するが P16 の長軸は桁行側柱ラインと西妻ラインに各々45°ふれており建物跡の西端の可能性を示唆している。柱穴の深さは P1：67.0 cm、P2：61.5 cm、P3：52 cm、P4：49.5 cm、P16：54.0 cm、P17：52.0 cm であり北東コーナーに位置する P1 が最も深い。

SX1 平場との関係については、その下端ラインと建物の側柱、西妻ラインがほぼ平行し、かつその下端ラインに近接しているので、SX1 平場は SB1 建物を建てるために斜面を切って造り出された可能性が高い。したがって SX1 平場の底面の段差は、むしろ掘り方の段差として捉えた方が良いのかも知れない。

(3)ピット群

確認調査・本調査を含めて、明確には遺構としての組合せを認定できないピットは 38 個を数える。このうち掘り方と柱穴痕が確認されるピットについては建物跡、柱穴列として痕跡を残す区画施設を構成する可能性をもつ。方向・柱間寸法に規則性が認められるものを「柱列」としてとりあげておきたい。

①　第 1 柱穴列（確認調査区）

確認調査なので P1 のみ掘り上げ柱穴痕と掘り方を確認した。柱間寸法は P1 と P2 間が 1.1 m 前後、P2 と P3 間が 1.3 m 前後である。建物桁行列の可能性がある。

②　第 2 柱穴列

柱間寸法は P1 と P2 間が 2.2 m、P2 と P3 間が同じく 2.2 m、P3 と P4 間が 2.4 m である。北辺列の中軸線は必ずしも柱穴痕の中心を通らない事と各掘り方に斉一性がないため必ずしも組合うとは限らない。柱穴痕跡は方形を呈している。

③　第 3 柱穴列

柱穴痕と掘り方の区別がつくのは P2 のみである。柱間寸法は P1 と P2 間が 2.1 m、P2 と P3 間が 2 m である。

(4)　溝状遺構

溝状遺構 2 条を検出した。

①　SD1 溝状遺構

西端は調査区外にのびる。西端近くでやや弧状を呈する。東端の平面形は丸味をおびて完結する。断面形は台形状を呈する。長さ 2.2 m 上端の最大幅は 65 cm、下端の最大幅は 25 cm、深

さは 20 cm を計る。直線部の方向は N-92°-E である。堆積土は暗褐色シルト。底面からピット 2 個が検出された。出土遺物は、土師器坏・甕片、須恵器坏の細片がある。

② SD2 溝状遺構

長さ 1.2 m を計る直線な溝である。断面は皿形を呈する。上端の最大幅は 22 cm、下端の最大幅は 15 cm、深さは 15 cm を計る。方向は N-105°-E である。堆積土は暗褐色シルトである。

図 7　SI1　竪穴住居跡埋設瓦観察表

No.	形態	製作技法	法　量 (cm)	凸　面	凹　面	側　面	胎　土	色　調	遺存度	分類	備考	写真図版
1	無段	板巻き		斜位ナデ	糸切・布目→木目状圧痕・布目一部ツブレ	A縦位ケズリ	砂粒	灰白	破片	I	凸型台	16－1
2	有段	紐巻き	幅19.1　厚1.7	縄叩き→ロクロナデすり消し	布目→紐接合線の一部を指ナデ	B縦位ナデ	大砂粒	〃	玉縁欠	III		16－2
3	無段	〃	幅 15.2　長 34.4　厚 1.3	縦位ナデ	布目→	B　〃	石英粒	〃	狭端欠	II		16－3
4	〃	板巻き	幅 15.1　長 30.7　厚 2.4	ナデ（中央辺縦位）	糸切→粘土板重ね痕→布目	B縦位ケズリ	白・黒色粒	暗青灰	完	I	凸型台か	16－4
5	〃	〃	幅 15.4　長 29.0　厚 2.1	縦位ナデ→縦位ケズリ(中央辺)	糸切→布目	B　〃	石英粒	灰白	〃	I	〃	16－5
6	〃	〃	長33.8　厚2.1	縦位ケズリ・ナデ(一部布目)	糸切→粘土板重ね痕→布目	B　〃	石英粒	灰	広端欠	I		16－6
7	有段	紐巻き	幅18.7　厚1.8	縄叩き→ロクロナデすり消し	布目	B　〃	砂粒	灰白・青黒	玉縁欠	III		17－1
8	〃	〃	幅18.3　厚1.6	〃	布目	B　〃	石英粒・白色粒	灰白	〃	III		17－2

注 1．板巻き、紐巻きは各々、粘土板巻き・粘土紐巻きの略
　 2．2・3・4・6・8 は広端側きわケズリ
　 3．側面形状　A ⌒　B ⌒
　 4．玉縁欠は全損、一部欠損を含む

図 9．10．11　SX1 平場・SB1 掘立柱建物跡出土瓦観察表

No.	層位	形態	製作技法	厚さ (cm)	凸　面	凹　面	側　面	胎　土	色　調	備考	写真図版
9－1	3層	丸瓦	粘土紐作り	2.3	ロクロナデ	紐巻き痕→布目	－	石英粒多	にぶい黄橙色	有段	17－5
9－2	〃	〃	不明	2.0	縦位ナデ	布目痕	B	白色粒(細粒)	褐灰色		17－3
9－3	4層	〃	不明	1.5	縄叩き→縦位ナデによるスリ消し	布目痕　狭端部へラケズリ	B	石英粒・白色粒多	灰黄色	無段	17－4
9－4	3層	平瓦	桶巻き作り	2.1	斜格子叩き→縦位の軽いナデ	横位糸切→粘土板合目→布目模骨痕	B ケズリ	黒色粒	灰色		17－6
9－5	〃	〃	桶巻き作り	2.0	正格子叩き（重複あり）	糸切→布目→斜位ケズリ（部分）	A ケズリ	黒・石英粒	灰白色		17－7
9－6	〃	〃	一枚作り	2.1	斜位縄叩き	布目痕→ナデ	A ナデ	白色粒	灰色		18－1
9－7	〃	〃	桶巻き作り	1.6	縦位縄叩き→縦位ナデ・ケズリ	模骨痕・布目→狭端部斜位ケズリ	B ナデ	石英粒	淡黄色		18－2
10－1	〃	平瓦	不明	1.6	縦位縄叩き→縦位ナデ・ケズリ	模骨痕・布目→狭端部斜位ケズリ	B ナデ	石英粒	淡黄色		18－3
10－2	〃	〃	一枚作り	1.9	縦位縄叩き→ツブレ側端部に圧痕	布目痕→ナデによるスリ消し	A ケズリ	石英粒	暗オリーブ色		18－4
10－3	〃	〃	一枚作り	2.3	縦位縄叩き→ツブレ	糸切→布目痕→ナデ	B ケズリ	白色粒	灰色		18－5
10－4	〃	〃	桶巻き作り	2.1	斜位縄叩き	横位糸切→布目模骨痕	A ケズリ	石英粒	にぶい黄橙色		18－7
11－1	〃	丸瓦	不明	1.7	縄叩き→ナデ	布目痕	－	石英粒・白色粒	灰色		
11－2	〃	〃	不明	2.0	無文叩き？	糸切→布目	B	黒色粒若干	灰白色		
11－3	床直	平瓦	不明	2.4	斜格子叩き→ナデ	布目痕・模骨痕（凸部にツブレ）	－	黒色粒	オリーブ灰色		
11－4	〃	〃	桶巻き作り？	2.4	長方形格子叩き	布目痕	－	石英粒	オリーブ灰色		
11－5	3層	〃	不明	1.4	平行叩き→ナデ	ナデ	－	白・石英粒	青灰色		
11－6	〃	〃	桶巻き作り？	1.9	縦位縄叩き→縦位ケズリ	模骨痕・布目→一部ケズリ	B	石英粒	淡黄色		
11－7	4層	〃	不明	2.7	縄叩き	布目痕・ナデ	－	小石・石英粒	緑灰色		

Ⅳ．５次調査

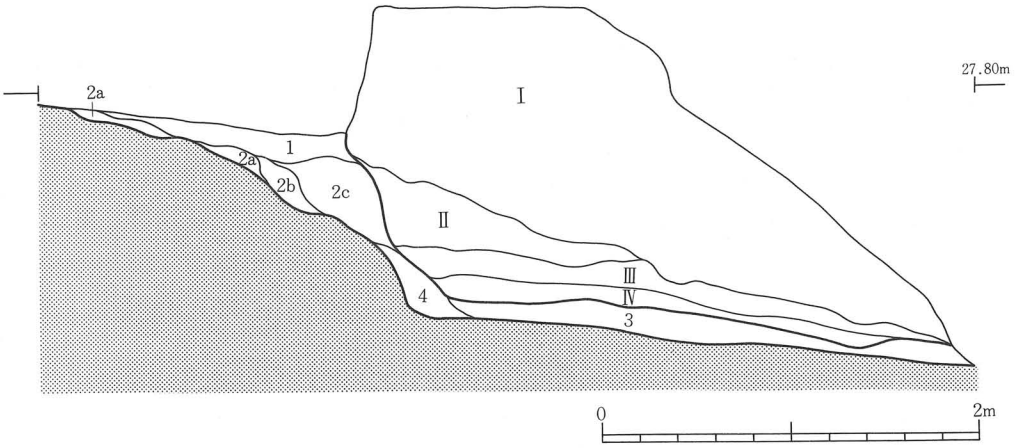
１．調査方法

５次調査の開発予定地は、遺跡のある丘陵の南東部分の南に向いた傾斜地にあり、４次調査区からは道路をはさんですぐ北西側にあたる。標高は26～28ｍ程である。

調査は工事による破壊が予想される部分を対象としているため、設定した調査区はかなり変形となっている。調査区は南北に基準線を設け、3ｍを単位としたグリッドを設定している。基準線はN-28°-Wである。グリッド名称は、南北軸にアルファベッド、東西軸にアラビア数字を用いている。

２．基本層序

調査区の現況は前述のとおりの傾斜地であり、以前は畑地として利用されていたようであるが、一部は近年の削平をうけた平坦面となっていた。調査区南半部を除いては、表土の直下が遺構確認面である黄褐色粘土質シルト層になっている。南半部分についてはほとんどが近年の削平をうけた上に盛土されており、盛土直下にわずかに暗褐色系シルト層をはさんで、砂岩系の基盤面となり、この面が遺構確認面となっている。



燕沢５次基本層序

層No	土　色	土 性	備　考
I	浅黄色5Y7/3と黒褐色10YR3/2のブロック層	砂礫層	天地返し層
II	黒褐色10YR2/3	砂質シルト	天地返し層
III	にぶい黄褐色10YR4/3	砂質シルト	小礫まじり　天地返し層
IV	褐灰色10YR4/1	粘土質シルト	ややグライ化
1	褐色10YR4/4	シルト	基本層序
2a	にぶい黄橙色10YR6/4	礫まじり	
2b	暗褐色10YR3/3	シルト	礫まじり　基本層序
2c	暗褐色10YR3/3	シルト	2b層と同一層　基本層序
3	にぶい黄褐色10YR4/3	砂質シルト	小礫まじり　基本層序
4	黒褐色10YR3/2	シルト	カーボン粒子若干まじる基本層序

図12　基 本 層 序

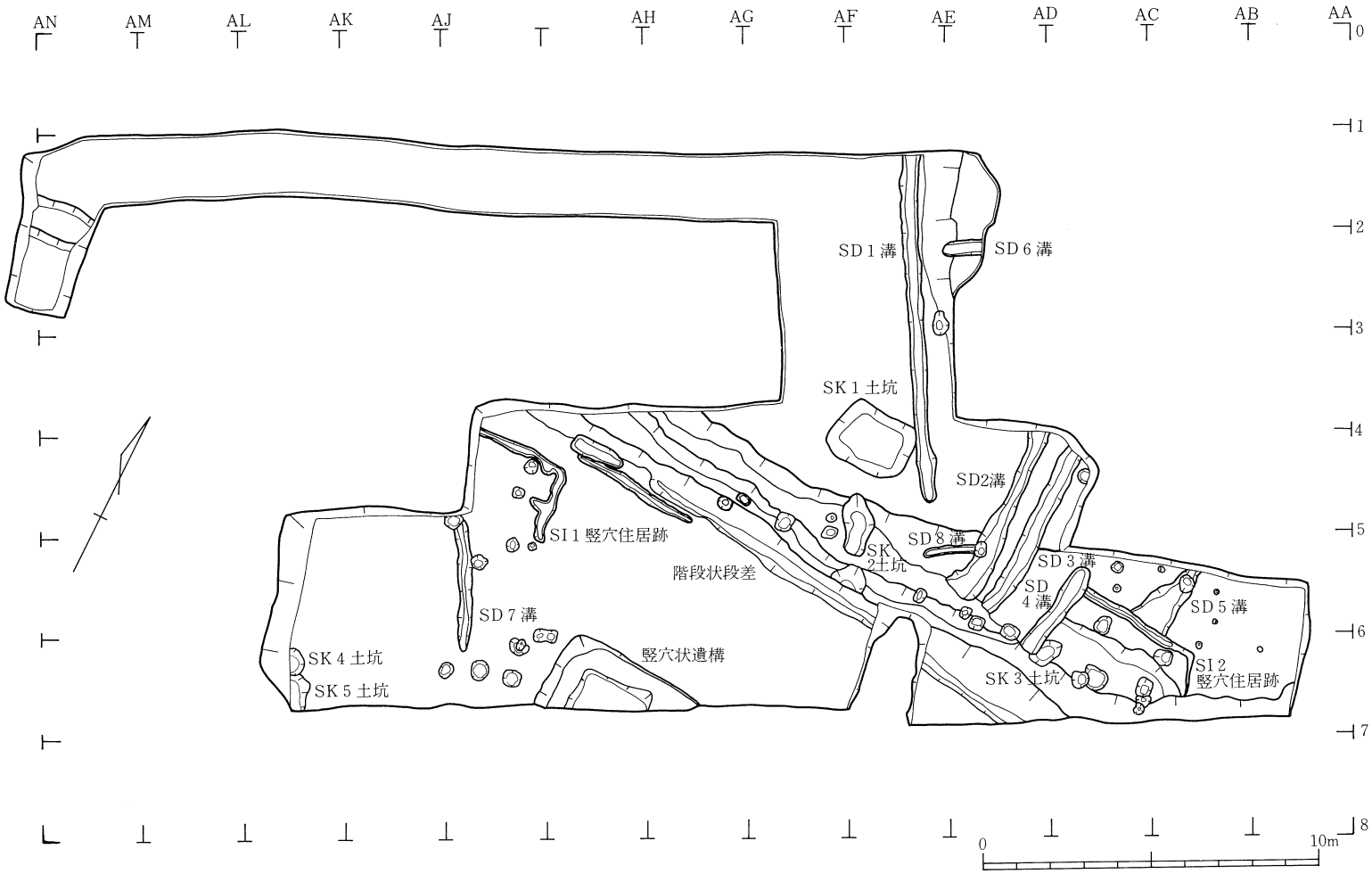


図13　５次調査遺構配置図

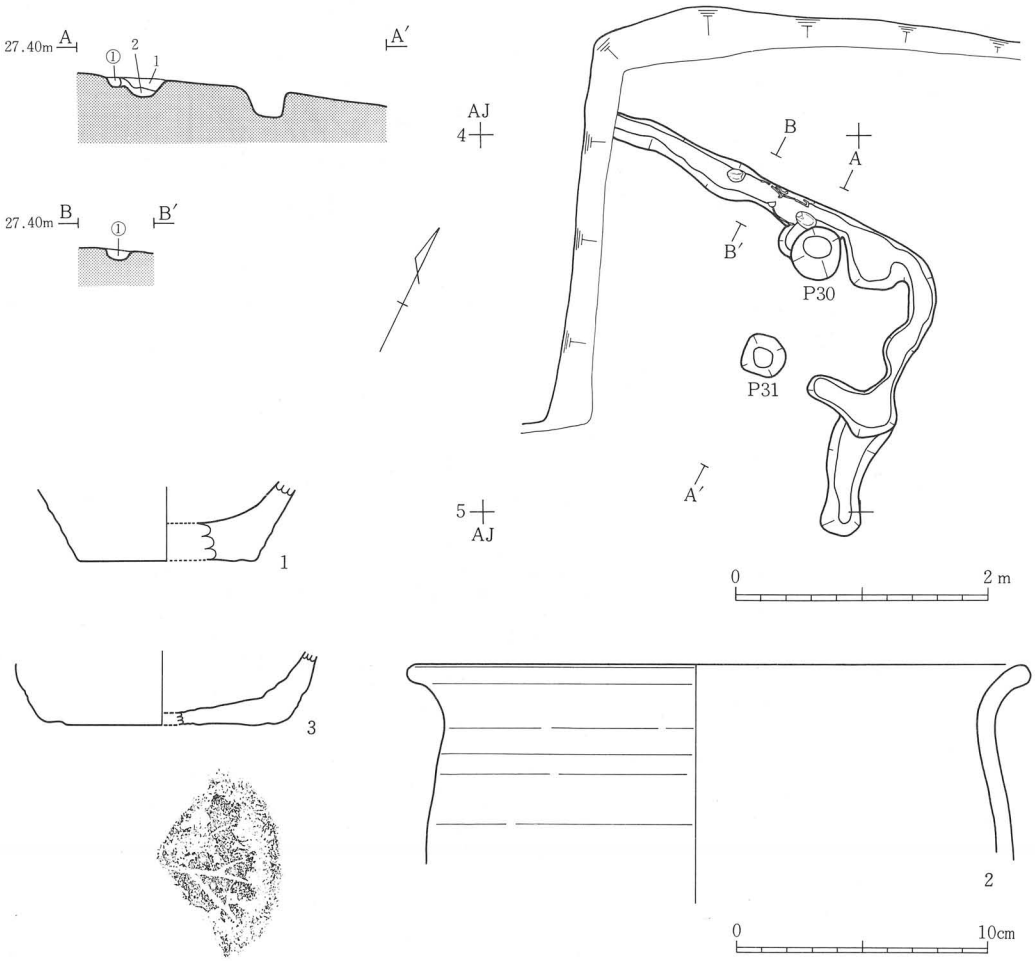
3．検出遺構と遺物

発見された遺構としては、竪穴住居跡・土坑・溝跡・ピット等がある。遺構の遺存状況は、後世の削平の影響が大きくよくない。

遺物は平箱で10箱程度の出土量である。種類としては、土師器・須恵器・中世陶器・瓦・石器等がある。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は2軒確認されているが、いずれも遺存状況はよくなく、プランの一部と周溝部



観　察　表

図・番号	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	遺存	備考	写真番号
14－1	土師器	甕	P1床直			－	－	7.0	底部		－
14－2	土師器	甕	P1	ロクロ調整	ロクロ調整	－	－	－	口縁部		32－3
14－3	土師器	甕	P2床直	底部木葉痕		－	－	9.0	底部		－

土層注記表

層No	土色	土性	備考
周溝①	黒褐色10YR3/2	シルト	カーボン粒子。焼土粒まじり
1	暗褐色10YR3/3	シルト	カーボン粒子。焼土粒まじり
2	暗褐色10YR4/3	シルト	カーボン粒子若干

図14　ＳＩ１竪穴住居跡・出土遺物

を確認したのみである。

① SI1 竪穴住居跡

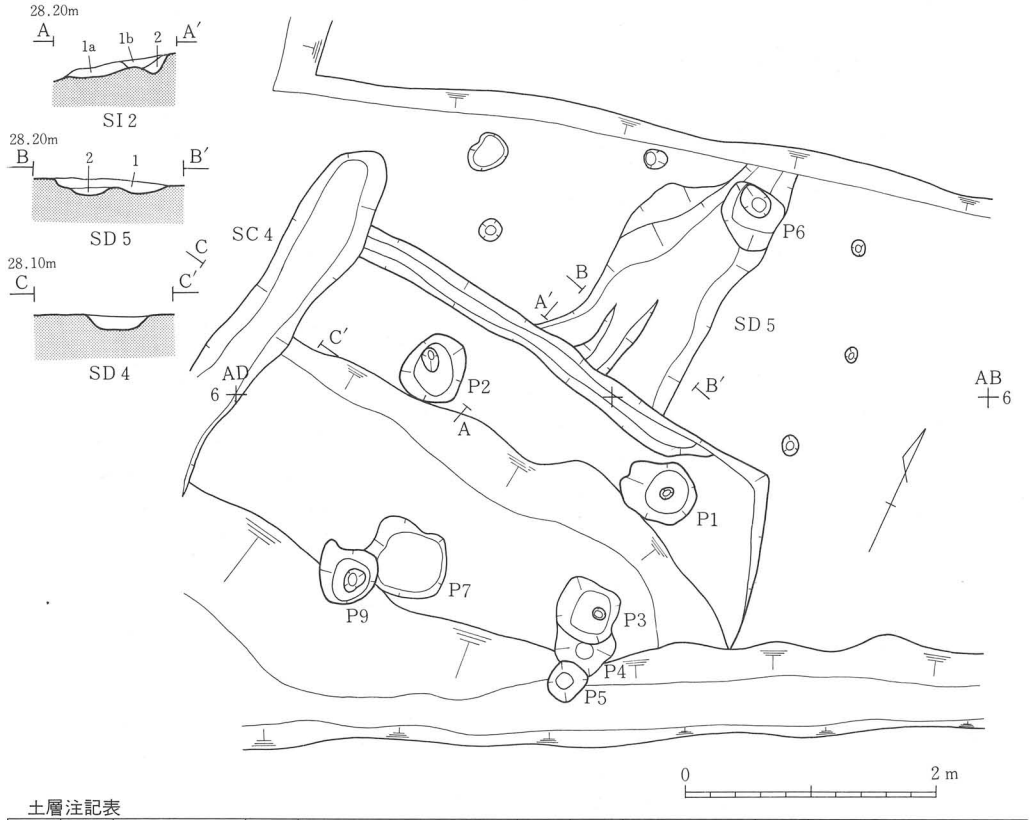
AI-4 区で竪穴住居跡の北東コーナー部を検出した。住居跡の南西部は削平をうけている。

平面形は方形を基調とし、その規模は北辺 2.90 m 以上・東辺 2.25 m 以上を計る。他遺構との重複関係はみられない。東辺の軸方向は N-4°-W である。堆積土は周溝内にのみ認められ、黒褐色系シルトの単層である。壁や床面は削平のため未検出であるが、北辺～東辺にかけて周溝を検出している。上端巾 20～35 cm・下端巾 10～25 cm・深さ 2～10 cm を計る。

遺物としては、北辺部の周溝側壁にはりつくように、土師器甕 2 個体の破片が横位の状態で出土している。

② SI2 竪穴住居跡

AB-6・AC-5・6 区で竪穴住居跡の北東コーナー部を検出した。住居跡の南半は削平をうけている。



土層注記表

遺構 No	層 No	土 色	土 性	備 考	遺構 No	層 No	土 色	土 性	備 考
SI2	1a	暗褐色10YR3/3	シルト	礫まじり	SD4	1	暗褐色10YR3/3	シルト	マンガン斑が若干まじる
	1b	暗褐色10YR3/3	シルト	カーボン粒子が若干まじる	SD5	1	暗褐色10YR3/3	シルト	礫まじり
	2	暗褐色10YR3/2	シルト	カーボン粒子が若干まじる		2	黒褐色10YR3/2	シルト	礫まじり

図15　ＳＩ２竪穴住居跡

平面形は方形を基調とし、その規模は北辺 3.70 m 以上・東辺 1.40 m 以上を計る。西側を 4 号溝に切られるが、北側で 5 号溝を切って構築されている。北辺の軸方向は N-88°-W である。堆積土は周溝内にのみ認められ、暗褐色系シルト層で 2 層に分けられる。壁や床面は削平のため未検出で、北辺部にのみ周溝を検出している。上端巾 17〜27 cm・下端巾 7〜12 cm・深さ 2〜10 cm を計る。柱穴は 2 個確認された。P-1 は不整円形を呈し、長軸 60 cm×短軸 47 cm・深さ 60 cm、P-2 は隅丸方形を呈し、一辺 47 cm 程度・深さ 20 cm であるが、底面に長軸 20 cm×短軸 13 cm・深さ 40 cm の小ピットがあり、柱穴痕と考えられる。

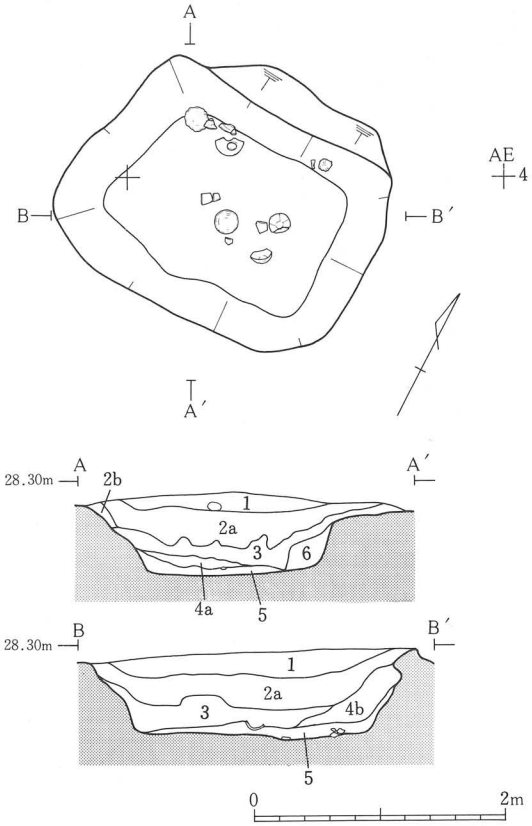
遺物としては、ピットの堆積土中から土師器坏・甕が出土しているが、すべて破片資料で図示できるものはなかった。

(2) 土坑

土坑は調査区全体で 5 基確認された。

① SK1 土坑

AB-3・4 区で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、その規模は長軸 2.30×短軸 1.60 m を計る。北東部でわずかに 1 号溝を切って構築されている。東辺の軸方向は N-1°-E である。堆積土は 5 層に大別され、1・2 層は灰黄褐色系シルト層、3〜5 層は褐灰色系シルト質粘土層で粘性がかなりつよい。下層部に向ってグライ化が進んでいる。壁はかなり急角度で立ち上がり、残存する壁高は 50〜60 cm を計る。



〔出土遺物〕

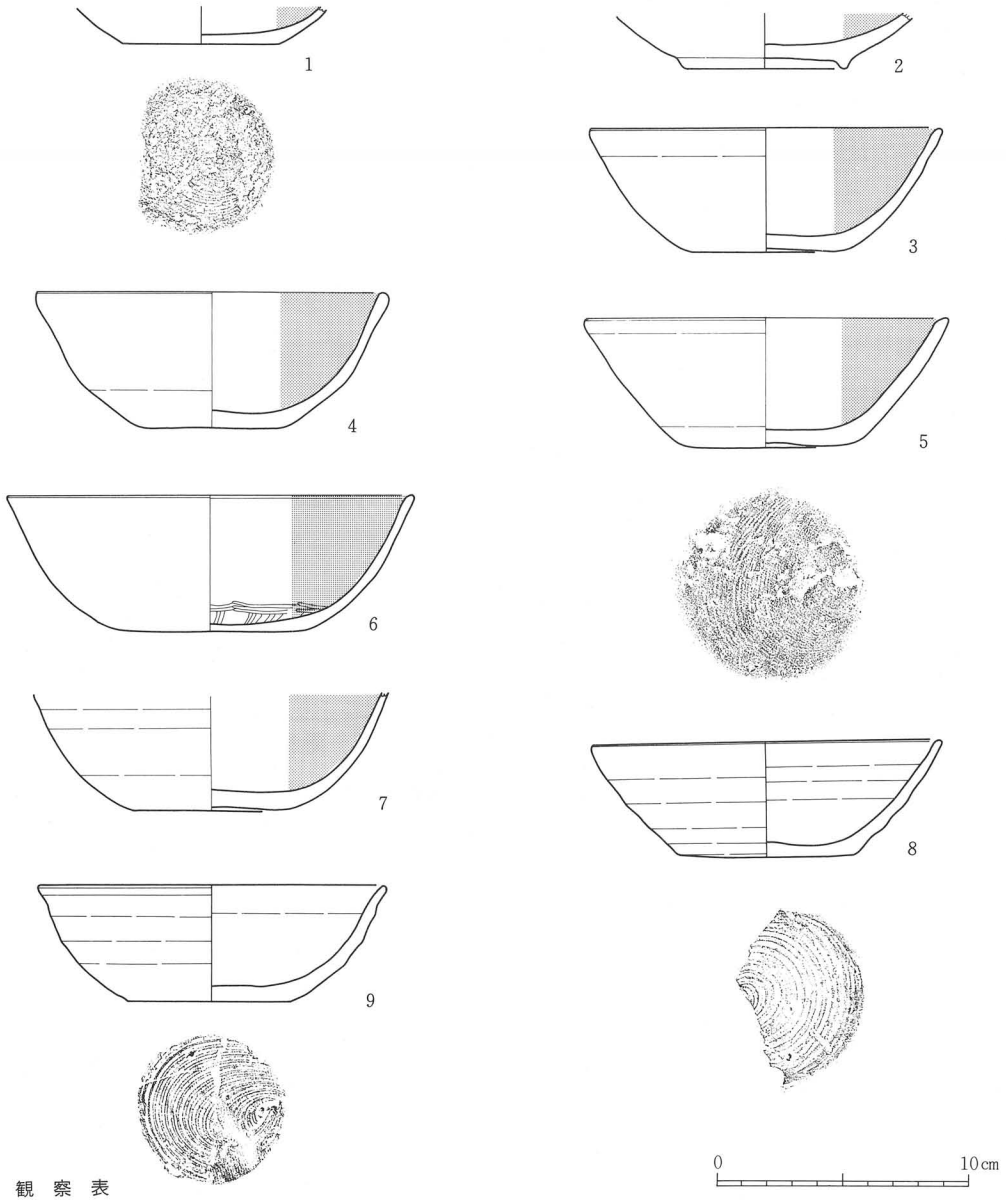
遺物としては、非ロクロ・ロクロ土師器坏・甕片・赤焼土器・須恵器坏・甕片・瓦などがある。ほとんどの遺物は堆積土中のもので、1・2 層からの出土が大半である。かなり多量の遺物が出土しているが、ほとんど破片資料であり、廃棄場としての性格が考えられる。

土層注記表

遺構 No	層 No	土 色	土 性	備 考
SK1	1	灰黄褐色10YR5/2	砂質シルト	カーボン粒普へん的に入る。酸化鉄、マンガン粒混入
	2a	灰黄褐色10YR4/2	砂質シルト	カーボン粒普へん的に入る。酸化鉄、マンガン粒混入
	2b	褐灰色10YR4/1	砂質シルト	砂まじり
	3	褐灰色10YR4/1	粘土	北壁側に 4 層土が若干まじる。カーボン粒子若干。グライ化土
	4a	灰黄色2.5Y6/2	粘土	酸化鉄、マンガン粒大量に入る。
	4b	灰黄褐色10YR4/2	砂	酸化鉄、マンガン粒大量に入る。
	5	褐灰色10YR5/1	粘土	グライ化土

※ 1、2 層中からの瓦・土師器・須恵器の出土が大半。瓦は埋土上面のみ出土。3 層下〜5 層中にかけて土師器出土

図16 SK1 土坑



観　察　表

図・番号	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	遺存度	備考	写真番号
17−1	土師器	坏	P-1	ロクロ調整（無調整） 底部回転糸切り	黒色処理　ヘラミガキ	−	−	5.8	底部		−
17−2	土師器	坏	C区1・2層	ロクロ調整付高台 底部調整不明	黒色処理	−	−	6.5	底部		−
17−3	土師器	坏	P-7	ロクロ調整マメツ 底部調整不明	黒色処理	13.7	4.9	5.9	ほぼ完形		31−1
17−4	土師器	坏	P-6	剝落不明 底部切離し調整不明	黒色処理	13.4	5.3	5.0	ほぼ完形		31−3
17−5	土師器	坏	P-8	ロクロ調整（無調整） 底部回転糸切り	黒色処理　ミガキ調整	13.95	5.15	7.0	1/2		31−7
17−6	土師器	坏	P-3	ロクロ調整（無調整）マメツ 底部回転糸切り？　マメツ	黒色処理　ミガキ調整	16.3	5.2	6.10	1/2		31−4
17−7	土師器	坏	P-9	ロクロ調整 底部調整不明	黒色処理　ミガキ調整	−	−	6.95	底部		31−2
17−8	赤焼土器	坏	D区3層	ロクロ調整（無調整） 底部回転糸切り	ロクロ調整	13.9	4.5	6.5	1/3		31−5
17−9	須恵器	坏	A区P-4・5	ロクロ調整 底部回転糸切り	ロクロ調整	14.2	4.7	5.7	1/2		31−6

図17　ＳＫ１土坑出土遺物

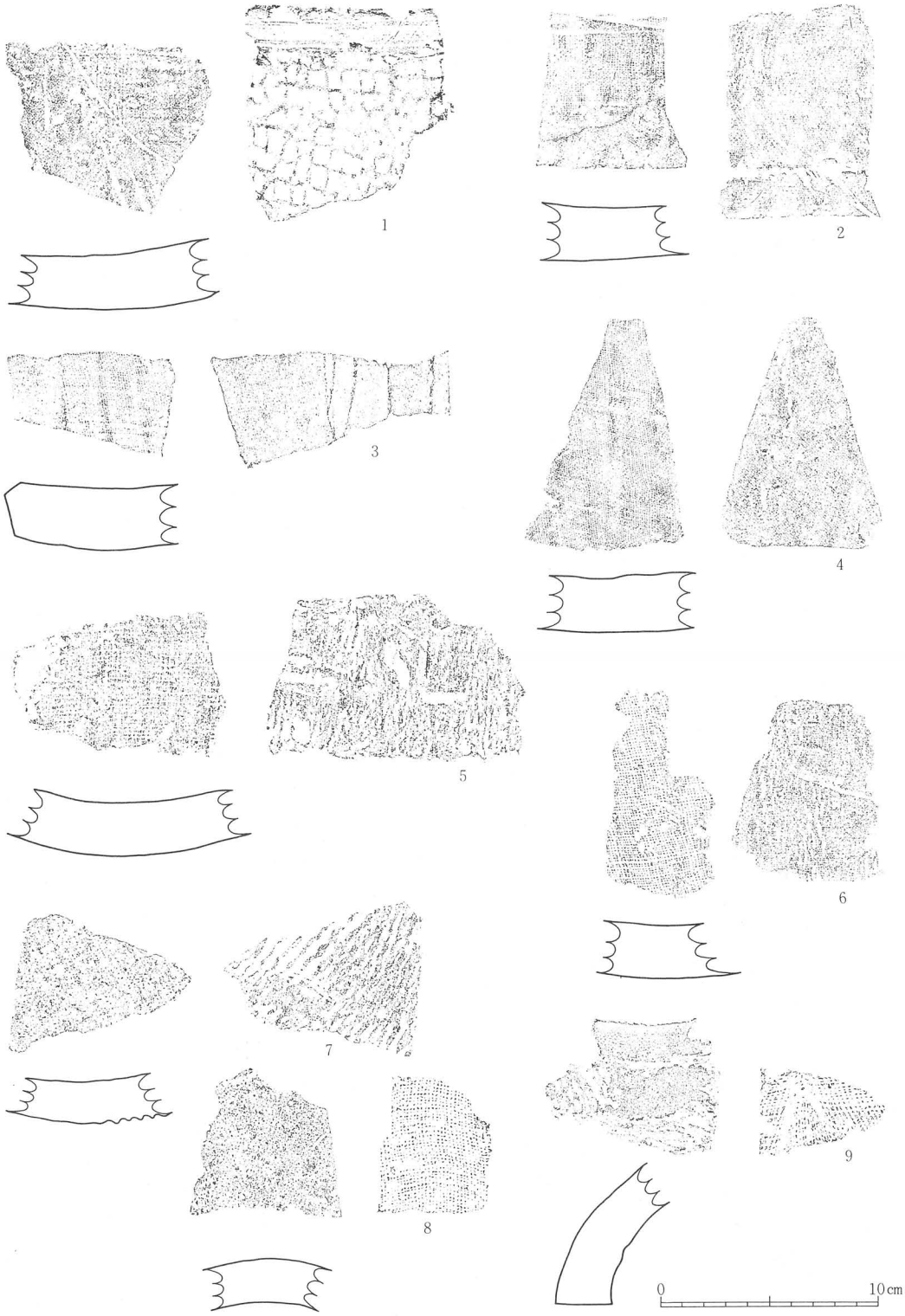


図18　ＳＫ１土坑出土瓦

図17は堆積土中からの遺物である。土師器坏1～7は、外面ロクロ調整のもので、内面が黒色処理されるが調整は磨滅により不明である。底部切り離しのわかるものは回転糸切りで、すべて無調整である。器高の割合が大きく、全体に深めの器形である。体部の立ち上がりは、内弯気味のもの（4・6・7）と、やや外反気味となるものがある（3・5）。8は赤焼土器で内外面ともにロクロ調整が施され、底部は回転糸切り無調整である。体部はやや内弯気味に立ち上がる。9は須恵器坏で、体部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。

瓦は、丸瓦2点、平瓦9点の計11点が出土している(図18)。1は平瓦Ib類で、凸面に正格子叩き目がみられ、凹面はナデ調整が施されている。3は平瓦3類で、凸面はナデ調整、凹面は布目痕と模骨痕がのこる。2・4・6は平瓦5類で、凸面は縄叩き後にナデ調整が施され、凹面は布面痕と模骨痕がのこる。5・7は平瓦4類で、凸面は縦方向の縄叩き目がみられ、凹面には布目痕が残るがナデ調整されている。5は凸面縄叩き後に一部がナデ調整されている。

丸瓦2点のうち9は有段のものである。

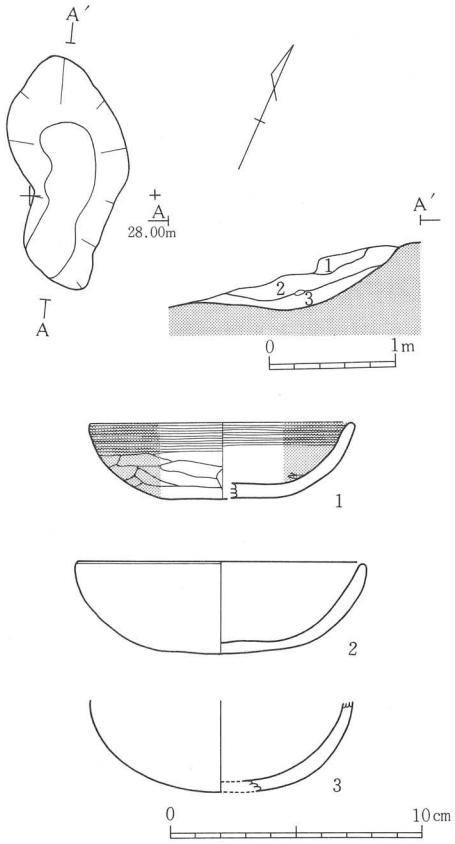
② SK2土坑

AE-4区で検出された。平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸1.30×短軸0.90mを計る。長軸方向はN-30°-Wである。堆積土は3層に大別されるが、灰黄褐色系シルト層でグライ化が進んでいる。壁はゆるやかに立ち上がっており、残存する壁高は20～40cmを計る。

〔出土遺物〕

非ロクロ土師器坏3点が床直で重なって出土した。器形はいずれも底部が丸底風の平底で、内弯気味に立ち上がる小形の坏である。(図19)

1は、内外面ともに黒色処理され、ていねいな調整が施されている。外面は、口縁部が横ナデされ、体部～底部にかけてヘラケズリが施される。内面はミガキ調整である。2・3は、磨滅のため内外面の調整は不明であるが、内面は黒色処理されている。



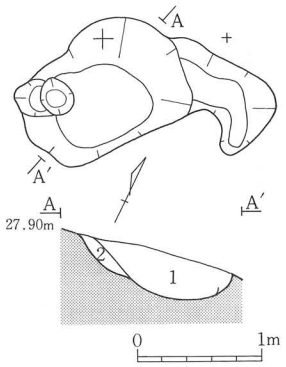
図・番号	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	遺存	備考	写真番号
19－1	土師器	坏	B区埋土	口縁部ヨコナデ 体部～底部ヘラケズリ	ミカギ調整	10.5	3.0	4.5		内外面ともに黒色処理	32－2
19－2	土師器	坏		剝落不明	剝落不明	11.5	3.7	4.5		内面黒色処理	32－1
19－3	土師器	坏	P1	剝落不明	剝落不明	10.0	3.5	3.0		内面黒色処理	31－8

遺構No	層No	土色	土性	備考
SK2	1	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	カーボン粒混入。マンガン粒
	2	灰黄褐色10YR4/2	シルト	カーボン粒混入。マンガン粒ややグライ化。
	3	黄灰色2.5Y4/1	シルト	カーボン粒混入。マンガン粒グライ化土。

図19　ＳＫ２土坑・出土遺物

③　SK3 土坑

AC-D-6 区で検出された。平面形は不整形を呈し、その規模は長軸 1.30 m・短軸 0.90 m を計る。長軸方向は N-10°-E である。堆積土は黒褐色系粘質シルトの単層である。壁はかなり急角度に立ち上がり、残存する壁高は 30～40 cm を計る。



遺構 No	層 No	土　色	土　性	備　　考
SK3	1	黒褐色10YR3/1	粘土質シルト	礫まじり、黒褐色10YR3/2 がまじる
	2	黄褐色10YR5/6	礫層	掘りすぎか

図20　ＳＫ３土坑

遺物としては、土師器（非ロクロ）坏・甕があるが、細片のため図示できるものはなかった。

④　SK4 土坑

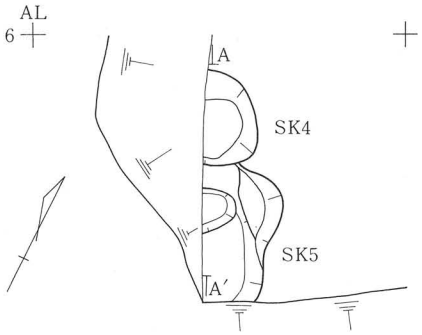
AK-6 区で検出された。プラン西側が調査区外にかかるが、平面形は不整円形を呈すると思われる。その規模は南北長 0.80 m・東西長 0.45 m 以上と思われ、第 5 土坑を切って構築されている。堆積土は 2 層に大別され、黒褐色系シルト層である。壁はかなり急角度に立ち上がっており、残存する壁高は 30～40 cm を計る。

遺物としては、土師器坏があるが、細片のため図示できるものはなかった。

⑤　SK5 土坑

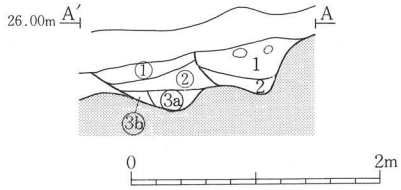
AK-6 区で検出された。プランのほとんどが調査区外にかかるが、平面形は隅丸方形を呈すると思われる。その規模は南北長 1.05 m 以上・東西長 0.60 m 以上と思われ、4 号土坑に切られている。堆積土は 3 層に大別され、にぶい黄褐色系シルト層で礫まじりである。壁はかなり急角度に立ち上がっており、残存する壁高は 25 cm を計る。

遺物としては土師器（非ロクロ）甕があるが、細片のため図示できなかった。



(3)　溝・溝状遺構

調査区全体で 8 条検出されている。いずれも小規模なもので、掘りこみも浅く、確認長も短かい。出土遺物は、1・2・3 号溝から土師器坏の細片と平



土層注記表

遺構 No	層 No	土　色	土　性	備　　考
SK4	1	オリーブ黒色5Y3/1	砂質シルト	上層部礫まじり。カーボン混入
	2	灰黄褐色10YR4/2	粘土質シルト	
SK5	①	オリーブ黒色5Y3/1	砂質シルト	カーボン粒子若干
	②	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	カーボン混入。礫まじり
	③a	褐色10YR4/4	シルト	礫まじり
	③b	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	②層よりも灰黄褐色土10YR4/2 に近い。

図21　ＳＫ４・５土坑

遺構No	地　区	全長(m)	上端幅　下端幅(cm)	深さ(cm)	断面	方　位	出　土　遺　物	備　考
SD1	AF2～AF5	10.30	30～55　15～35	10～30	舟底形	N-29°-W	土師器坏(内黒)1、平瓦1b類1	SK1にわずかに切られる
SD2	AE5・6	5.50	40～100　15～65	3～10	舟底形	N-1°-E	土師器坏4(内黒3)、平瓦4類	SD8を切っている
SD3	AD5・AE5・6	5.30	40～65　25～35	5～15	舟底形	N-2°-E	土師器坏1	
SD4	AD6	3.00	45～60　20～35	3～10	舟底形	N-9°-E		SI2を切っている
SD5	AC6	2.00	45～125　35～110	5	舟底形	N-10°-E	石鏃出土	SI2に切られる
SD6	AE3	1.20	35～40　16～20	20～30	U字形	N-74°-E		
SD7	AJ6	4.00	30～40　5～10	3～10	舟底形	N-26°W		
SD8	AE・AF6	1.50	16～18　14～16	1～3	舟底形	N-71°E		SD2に切られる

第3表　溝・溝状遺構観察表

瓦が、5号溝から石鏃が出土している。他の遺構との関連もみられず、時期・性格ともに不明である。

(4)　ピット群

調査区全体で41個確認されている。調査区中央部を東西に走る階段状の段差の上面に29個、下面に12個検出されているが、柱痕跡がみられたものはなかった。建物跡を組むようなものはみられず、性格や時期等は不明である。

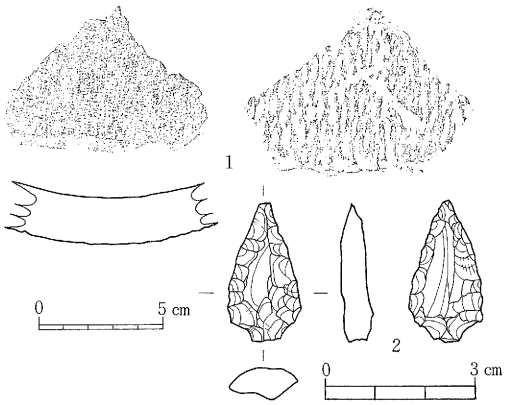


図22　ＳＤ２溝出土瓦・ＳＤ５溝出土遺物

(5)　階段状段差

調査区中央部を東西に走るもので比高差は1.20ｍ程である。調査区南東側の4次調査区内では現地形としてこの段差が確認されている。平場を作りだすための整地に伴うものと思われるが、段切りの時期については近年のものとしておきたい。

4．遺構外の出土遺物

〈瓦〉

瓦は、軒丸瓦1・丸瓦6・平瓦40の計47点が出土している。1号土坑及び2号溝の堆積土中から出土した12点を除き、基本層中又は表採資料である。全て破片資料で、しかも小破片が多いため全容を知りえるものはない。

図23－1は軒丸瓦で、欠損品のため全容が不明であるが、「細弁蓮花文軒丸瓦」と思われ、多賀城Ⅳ期310－B類とされるものである。2は丸瓦4ａ類で、縄叩き後にナデ調整が施されている。3は丸瓦3類で、凸面ナデ調整が施される。4は平瓦1ａ類で、凸面に斜格子叩きがみられる。5・6は平瓦2類で、凸面平行叩きのものである。5は二方向の平行叩きがみられ、6は横方向の荒い叩きが施されている。7は平瓦3類で、凸面ナデ調整、凹面には模骨痕がのこる。8～10は平瓦4類で、凸面には縦方向の縄叩き目がみられ、凹面は布目痕がのこるもののナデ調整が施される。8の凸面には、凹型台の側端部圧痕がのこる。

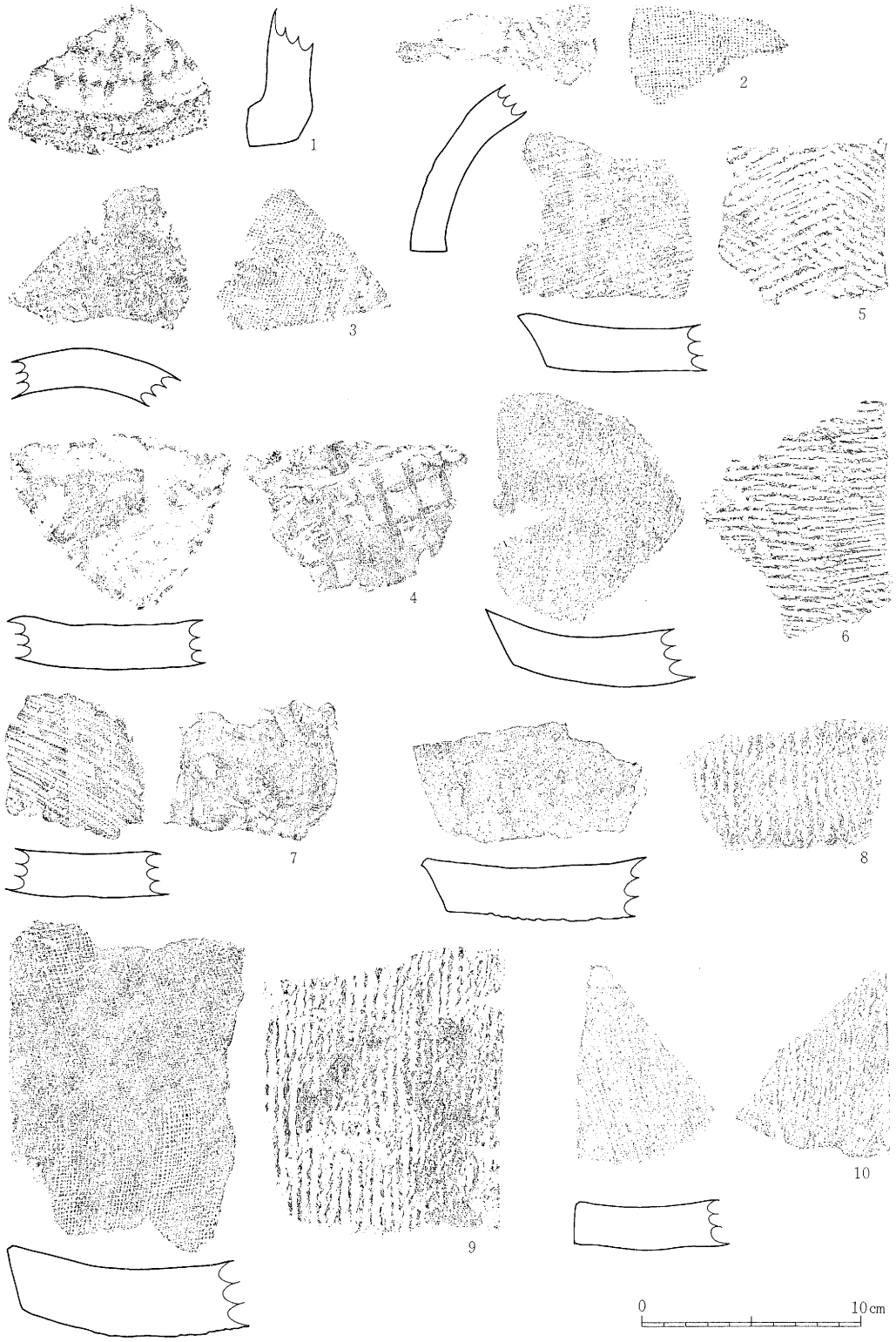


図23　遺構外出土瓦

今回出土した瓦を成形・調整技法からみると、平瓦40点のうち25点が4類とした凸面縄叩きのものである。丸瓦については、3・4類がそれぞれ3点ずつで、1・2類の丸瓦はない。造瓦技法についてみると、平瓦については「粘土桶巻き作り」と「一枚作り」の2つにわけられる。平瓦1・2・5類、3類の一部が桶巻き作り、平瓦4類は一枚作りとおもわれる。

次に瓦各類の年代等についてであるが、平瓦1～3類、丸瓦3類は多賀城創建期以前か、創建期の可能性が考えられる。平瓦4類のなかには、凹型台の側端部圧痕をのこすものがあり、これは多賀城の平瓦II B-b類、III期に分類されている。

5．出土遺物（土師器）について

器種としては、坏・高台付坏・甕がある。ロクロ使用のものと、ロクロ不使用のものがあるが、大半はロクロ使用のものである。SK1･2土坑から出土したものをのぞいては、いずれも小破片であり図示できるものはなかった。

SK1土坑の資料はいずれも堆積土中のものであるが、遺物量も多くほぼ完形となる坏が8点出土している(図17)。これらの坏は4をのぞいては、いずれも外面にロクロ目が観察され、内面に黒色処理・ヘラミガキが施されるもので、底部切り離しは回転糸切りである。体部の立ち上がりは、内弯気味と外反気味のものとがあり、無調整である。

これらの土器は、その特徴から「表杉ノ入式」に相当するものであり、平安時代を通じて製作・使用されたと考えられている。表杉ノ入式の土師器坏は、成形・調整技法の点から細分が指摘されており、製作技法の手数の省略化により変遷するとされている。このことは、ロクロ技術の進展の結果として、体部再調整から無調整へと変化していくものと把えられる。SK1土坑の坏をこれにあてはめてみると、体部無調整であることから、表杉ノ入式のなかでもより新しい様相を示していると考えられる。

図18　SK1土坑出土瓦観察表

No.	分　類	製作技法	厚さ	凸　面	凹　面	側　面	色調	備　考	写真図版
1	平瓦1b類	不明	2.5cm	格子叩き（正格子）	ナデ調整	ヘラケズリ	灰白色	多賀城I期 II類	29－1
2	平瓦5類	桶巻き作り	2.3cm	縄叩き→ナデ調整	布目痕（緻密）模骨痕	ヘラケズリ	灰白色	I期・I B-a類	29－2
3	平瓦3類	桶巻き作り	2.3cm	ナデ調整（縄叩き？）	布目痕（緻密）模骨痕	ヘラケズリ	灰白色	I期・I B-a類	29－3
4	平瓦5類	桶巻き作り	2.4cm	縄叩き→ナデ調整	布目痕（緻密）模骨痕	ヘラケズリ	灰白色	No2と同一個体	29－4
5	平瓦4類	不明	2.3cm	縄叩き（縦方向）一部ナデ調整	布目痕ナデ調整	小口面ヘラケズリ	黄褐色	I期・II A類	29－5
6	平瓦5類	桶巻き作り	2.2cm	縄叩き→ナデ調整	布目痕（緻密）模骨痕		灰白色		29－6
7	平瓦4類	不明	1.6cm	縄叩き（斜方向）縄目ツブレ	布目痕ナデ調整		灰色	II B類	29－8
8	丸瓦3類	〃	2.0cm	ナデ調整	布目痕		灰色		29－7
9	丸瓦4a類	〃	2.0cm	縄叩き→ロクロナデ調整	布目痕	ヘラケズリ	灰白色	II B-a類	29－9

図22　SD2溝出土瓦・SD5溝出土遺物観察表（単位 cm）

SD2溝出土

No.	地区・層位	分　類	製作技法	厚さ	凸　面	凹　面	側　面	色調	備考	写真図版
1	SD2埋土	平瓦4類	不明	2.0	縄叩き（縦方向）	布目痕（ツブレ）	小口面ヘラケズリ	灰色		

SD5溝出土

No.	器　種	層位	全長	最大幅	厚　さ	石　材	写真番号
2	石鏃	SD5埋土	2.9	1.5	0.5	頁岩	32－4

図23　遺構外出土瓦観察表

No.	地区・層位	分　類	製作技法	厚さ	凸　面	凹　面	側　面	色調	備考	写真図版
1	AEF-4区	軒丸瓦(細弁蓮花文軒)	不明					褐灰色	多賀城IV期 310-B類	30－1
2	AE-6区	丸瓦4a類	〃	1.5cm	縄叩き→ナデ調整	布目痕	ヘラケズリ	〃		30－2
3	〃	〃3類	〃	1.3cm	ナデ調整	布目痕		灰白色		30－3
4	AE-6区	平瓦1a類	〃	2.0cm	格子叩き（斜格子）	布目痕		〃		30－4
5	AM-2区	平瓦2類	桶巻き作り	2.1cm	平行叩き(2方向の叩き目痕)	布目痕（緻密）		〃		30－5
6	AE-6区	〃	1枚作り	2.0cm	平行叩き(横方向叩き目荒い)	布目痕(緻密)ナデ調整	ヘラケズリ	褐灰色		30－6
7	AE-6区	〃3類	桶巻き作り	1.8cm	ナデ調整	布目痕(緻密)模骨痕		灰白色		30－7
8	AAH-4・5区	〃4類	不明	2.4cm	縄叩き（縦方向）・縄目ツブレ	ナデ調整一部に布目痕	ヘラケズリ二段面とり	灰色	II B-b類 凹型台カ	30－8
9	AEF-4区	〃	1枚作り	2.8cm	縄叩き(縦方向)縄目ツブレ	布目痕、ナデ調整	ヘラケズリ二段面とり	〃	II B類	30－9
10	〃	〃	不明	2.0cm	縄叩き（縦方向）	布目痕(緻密)ナデ調整	ヘラケズリ	〃		

V．6次調査

1．調査方法

6次調査の開発予定地は、舌状丘陵上に立地する燕沢遺跡の中でも高所（標高約30 m）のゆるやかな北斜面上にあたる。1次調査区の東に隣接しており、市道をはさんだ北側に2次調査区がある。

調査は、掘削工事となる車乗り入口及び市道拡幅部を対象として試掘調査を行ったのち、本調査を実施した。逆L字型となる調査区のうち、南北にのびる部分をI区、東西にのびる部分をII区としている。

2．基本層序

調査箇所は舌状丘陵上に立地する燕沢遺跡の中でも高所（標高約30 m）のゆるやかな北斜面上にあたる。現況は畑地として利用されており、畑の耕作土をはぐと大部分のところで明黄褐色シルト質粘土層が分布しており、この上面が全遺構の確認面となっている。以下、層序の内容を記す。

第1層は、にぶい黄褐色（10 YR4/3）シルトで表土であり、畑の耕作土である。層厚10～30 cm。

第2層は、にぶい黄褐色（10 YR5/4）粘土質シルトで調査区北部の一部に分布する。層厚5～10 cm。第3層は明黄褐色（10 YR6/6）シルト質粘土で第1・2層に比して硬くしまっている。

3．検出遺構と遺物

検出された遺構は溝状遺構8条（SD1～8）、土坑2基（SK1・2）、ピット69個、焼面1箇所である。全体に耕作等における削平が及んでおり遺構の遺存状況は悪い。焼面は周辺の溝状遺構、柱穴痕のあるピットと組み竪穴住居跡を構成する可能性があり、後述する。

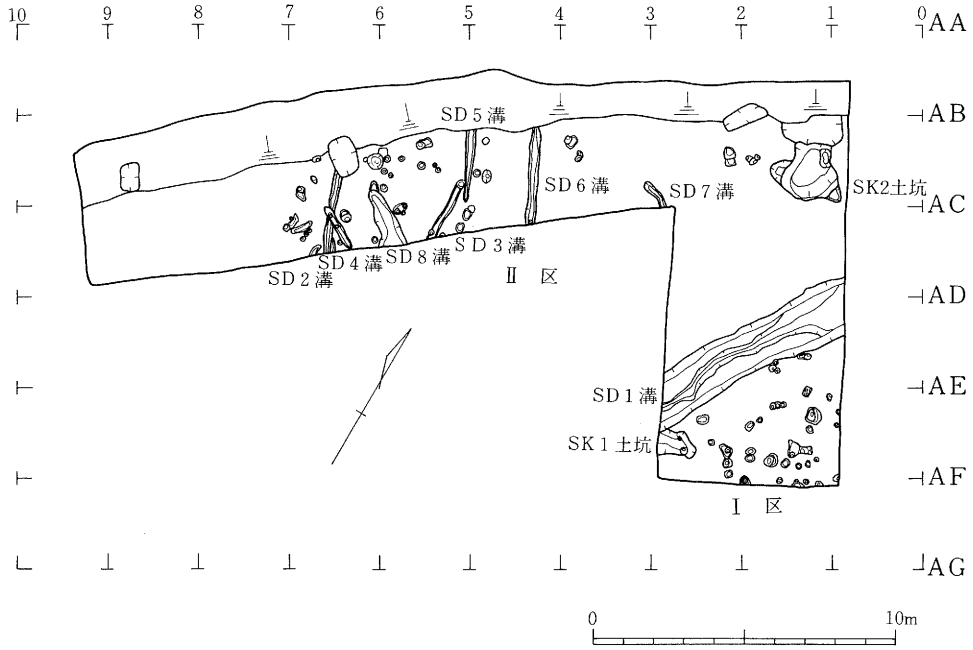
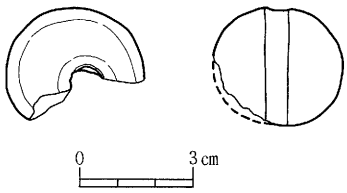


図24　６次調査遺構配置図

(1)　SD1 溝状遺構

検出長 7.75 m で更に東西にのびる。上端幅 1.5～1.8 m、下端幅 1.1～1.35 m を計る。方向は N-31°-E である。SK1 土坑と重複し、これを切っている。断面形は逆台形状を呈し壁面の傾斜角は 30～40°で直線的もしくは内弯する。堆積土は第 1 a 層暗褐色（10 YR3/3 シルト）、第 1 b 層は黒褐色（10 YR3/2）シルト、第 2 層は暗褐色（10 YR3/3 シルト）で黄褐色（10 YR5/6）シルトの粒子が混合する。堆積土層は傾斜面に沿った自然堆積の様相を呈している。

底面は、ほぼ平坦であるが、底面のほぼ中央に浅い（深さ 2～3 cm）溝状遺構がある。調査区西端では上幅 20 cm であるが、東端では SD1 溝状遺構の下端に接続してしまう。底面傾斜は北東方向へ、ゆるやかに傾斜している（6 m で標高 43 cm 下がる）。

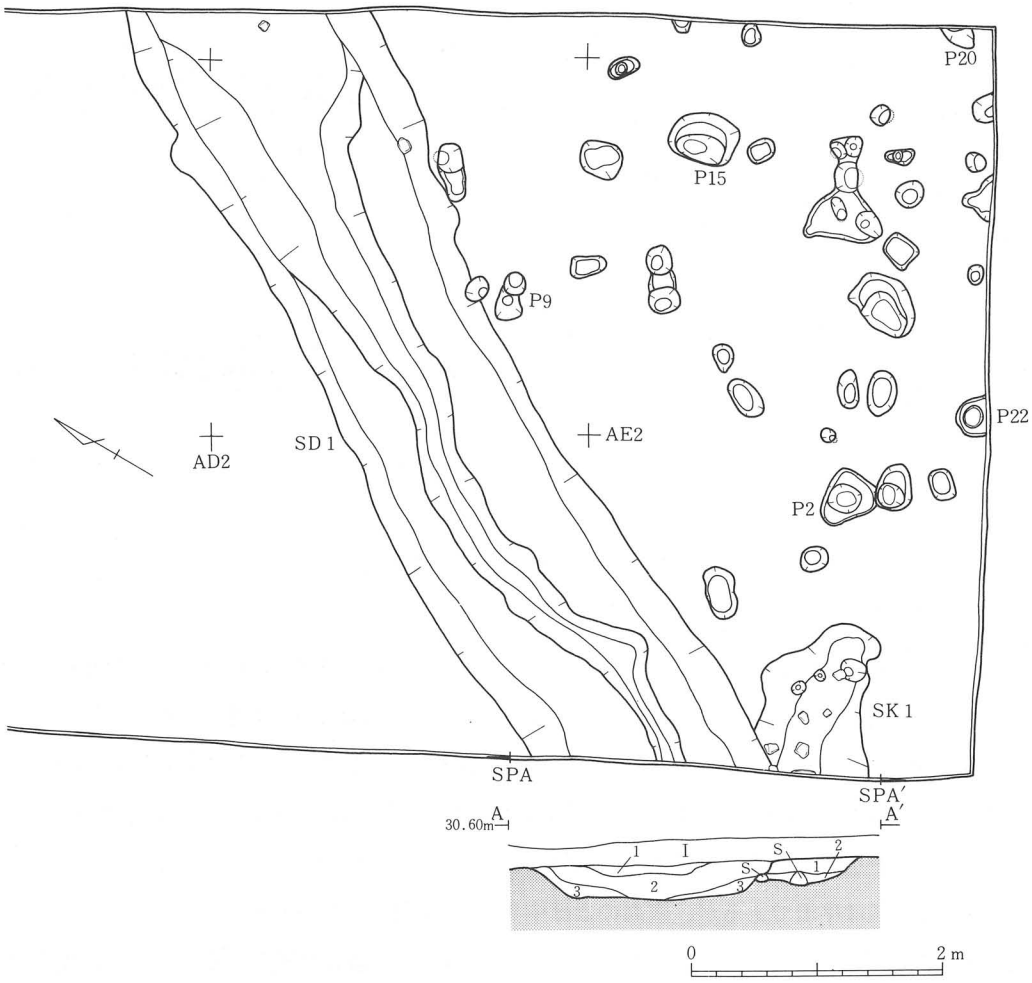


土玉観察表

No	種　別	器　種	層　位	直　径	胎　土	色　調	備　　考	写真図版
1	土製品	土玉	SK1 埋土	3.3	石英粒多い	明褐色	径 4 mm 程の貫通孔がある	32－6

図25　ＳＫ１土坑出土・土玉

出土遺物は堆積土１層より瓦（丸・平瓦）片、土師器坏、甕片、赤焼土器？坏（回転糸切離し非調整）、磨面のある円礫が出土している。堆積土２層からは土師器坏・甕片、須恵器坏片、



土層注記表

遺構 No	層 No	土　色	土　性	備　　考
基本層	I	灰黄褐色10YR4/2	シルト	耕作土。明褐色7.5YR5/6 斑状に入る
SD1 埋土	1	暗褐色10YR3/3	シルト	黄褐色10YR5/6 斑状にまじる。カーボン粒子若干入る。
〃	2	黒褐色10YR3/2	シルト	カーボン粒入る。
〃	3	暗褐色10YR3/3	シルト	黄褐色10YR5/6 斑状にまじる。カーボン粒入る。

図26　ＳＤ１溝状遺構・ＳＫ１土坑・ピット（Ｉ区）

図27　ＳＤ１溝他出土瓦観察表（単位cm）

No	地区・層位	分　類	製作技法	厚　さ	凸　　面	凹　　面	側　面	色　調	備　　考
1	表土	丸瓦３類	不明	1.5	ナデ調整	布目痕		灰色	
2	表土	丸瓦	〃	2.4	ナデ調整？	布目痕	当面ヘラケズリ	灰色	
3	SD1 埋土	丸瓦３類	〃	1.9	ナデ調整	布目痕		褐色	
4	表土	平瓦２類	〃	2.3	平行叩き(斜方向・叩き目あさい)	布目痕（緻密）		灰色	
5	１区	平瓦４類	〃	2.2	縄叩き目（縦方向）	布目痕	ヘラケズリ	灰色	一部に自然釉がかかる。
6	１区	平瓦４類	〃	2.2	縄叩き目（縦方向）	布目痕			

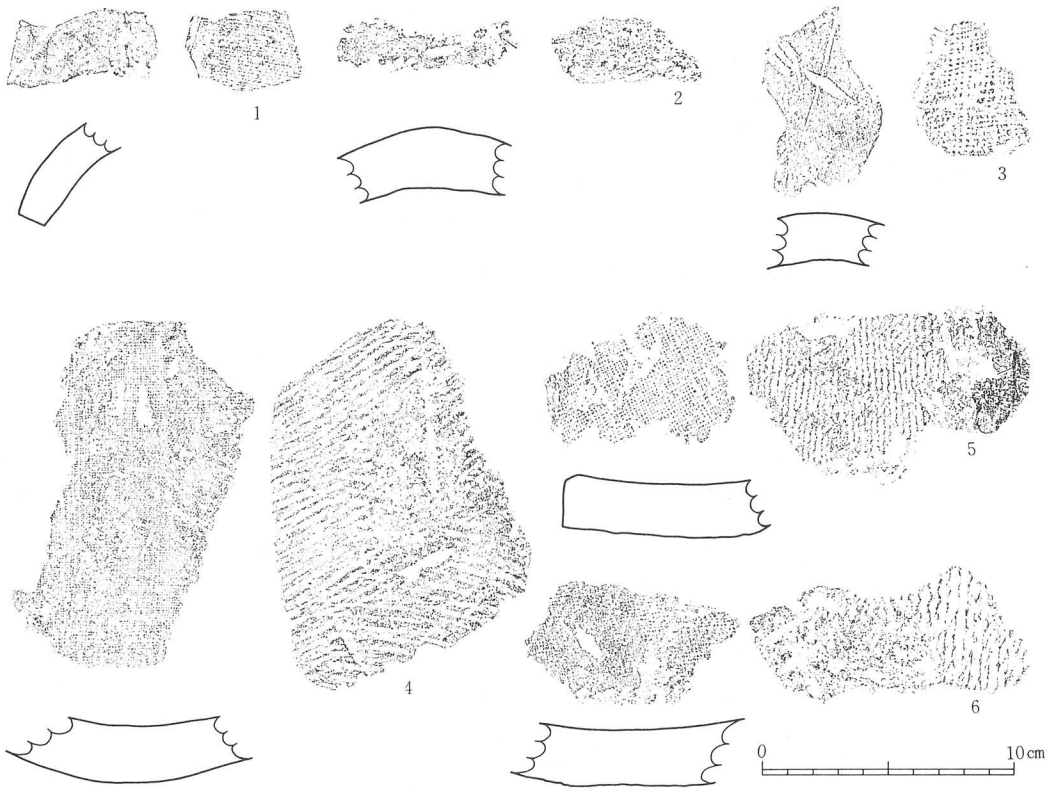


図27　ＳＤ１溝他出土瓦

赤焼土器？坏片が出土している（瓦は出土していない）。堆積土１層からの出土が相対的に多い。

SD2～8 溝状遺構については表記載する。

(2)　SK1 土坑

SD1 溝状遺構と重複し、これに切られる。長軸 1.32 m 以上、最大幅 1 m、深さ 17 cm（最深）を計る。平面形は不整形で、遺構は調査区西方にのびるため全容を知りえない。堆積土は第１層黒褐色（10 YR3/2）シル

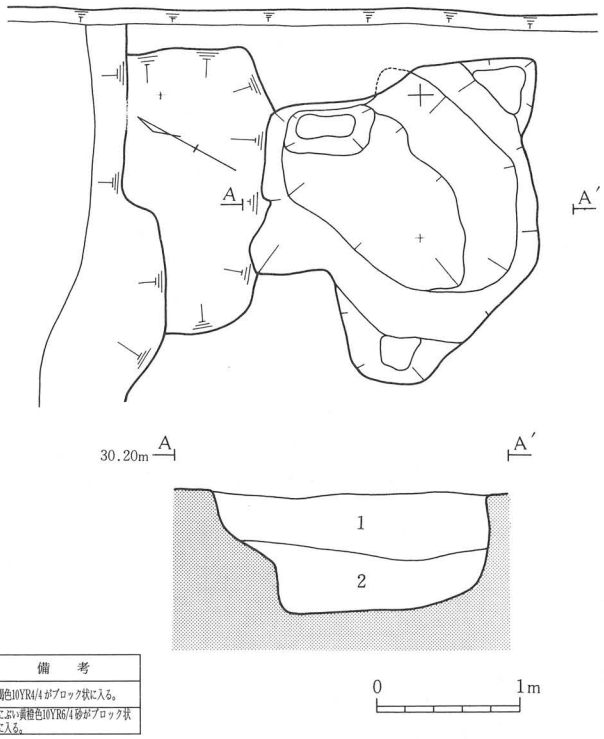


図28　ＳＫ２土坑

土層注記表

遺構No	層No	土　色	土　性	備　考
SK2	1	にぶい黄橙色10YR7/3	粘質シルト	褐色10YR4/4がブロック状に入る。
	2	褐色7.5YR4/4	粘質シルト	にぶい黄橙色10YR6/4砂がブロック状に入る。

観　察　表

図・番号	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	器高	底径	遺存	備考	写真番号
29－1	土師器	坏	SD2埋土	剝落不明	剝落不明	6.0	－	2.4	体部1/2	底部に穿穴	32－5

ト、第2層は黒褐色（10 YR2/3）シルトで炭化物を多量に含む。土層は水平堆積の様相を呈している。底面には凹凸があり、円礫（5～20 cm）が底面及び堆積土2層（計7個）中より出土している。円礫が底面で組合っていた可能性がある。出土遺物は堆積土中より土玉1個(図25)、土師器片若干が出土している。

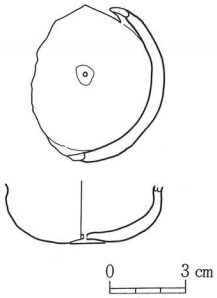
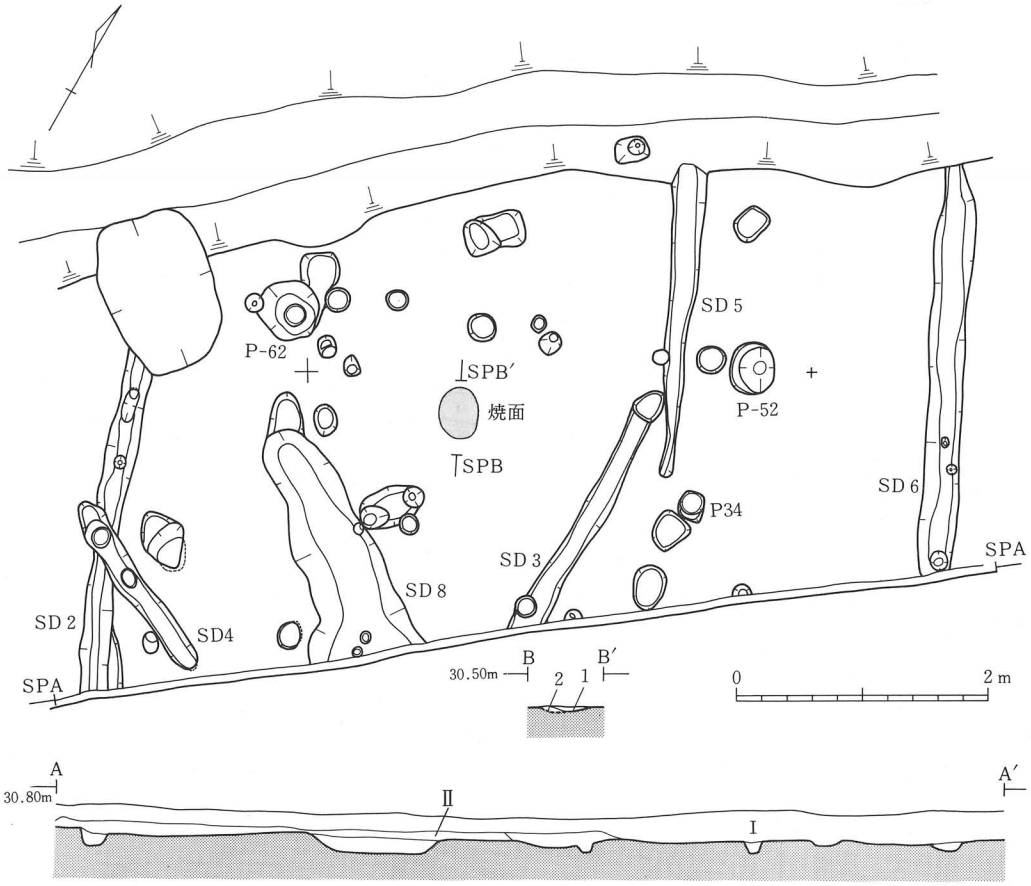


図29　ＳＤ２溝出土

(3)　SK2 土坑

上端の平面形は不整形、下端の平面形は不整楕円形を呈する。長軸2.1 m、深1.8 m(最深部)



遺構No	層No	土色	土性	備考
基本層	I	にぶい黄褐色10YR4/4	シルト	耕作土
	II	にぶい黄褐色10YR5/4	粘土質シルト	
焼面	1	赤味のある褐色10YR4/4	シルト	焼土
	2	赤色10R4/4	シルト	地山が熱をうけて赤変している。
SD2	1	褐色10YR4/4	シルト質粘土	
SD8	1	明黄褐色10YR6/6	シルト質粘土	
SD3	1	暗褐色10YR3/3	粘土質シルト	
Pit	1	褐色10YR4/4	シルト質粘土	
SD6	1	褐色10YR4/4	シルト質粘土	

図30　その他の遺構（II区）

を計る。堆積土はにぶい黄橙色（10 YR7/3）粘土質シルトと暗褐色（10 YR3/3）シルトがブロック状に混合し、人工的な堆積の状況を呈している。堆積土に風化した円礫が多数含まれる。壁面付近には半ば炭化した樹木片が認められた。

(4) ピット

ピットは69個検出された。このうち掘り方と柱穴痕の確認されたのは（可能性を含めて）、P2・9・15・22（Ⅰ区）・34・52・62（Ⅱ区）である。P2とP15及びP20は直交区画をなすものの、柱間寸法等の検討ができないので可能性の域を出ない。

(5) 焼面と竪穴住居跡の可能性

Ⅱ区のほぼ中央部で焼面が検出された(図30)。平面形は南北を長軸とする楕円形である。長軸42 cm短軸30 cmを計る。深さ約3 cmの焼土を掘り上げると、第3層が熱により赤変していた。この焼面の東方3.5 mにSD6溝状遺構があり、これとほぼ平行して、その西約6.2 mにSD2溝状遺構が存在する。両溝状遺構の堆積土からは非ロクロ使用の土師片一括が出土しており、SD2のものは古墳時代前期塩竈式の壺体部一括である(図29)。SD2とSD6にほぼ直交して、掘り方と柱穴痕の区別の認められるP62とP52がある。さて本調査区の道路をはさんで北側の第2次調査区では古墳時代前期の竪穴住居跡が4軒（可能性を含めて）検出されている。このうち遺存の良好なSI5の概容を記す。北辺と南辺に周溝が検出され両者の距離は約6.2 mを計る。柱穴は住居跡対角線上に4基認められる。住居中央部北寄りに地床炉と考えられる「焼土塊」がある。東辺の軸線はN-25°-Wである（本調査区のSD2・6に近似）。以上の点は本調査例が焼面とSD2・6及びピットに構成された竪穴住居跡の可能性が高いことを示唆するとともに、2次調査で検出された丘陵頂部の3軒の住居跡と同一グループ（位置・方向から）を成す可能性をも示唆しているといえよう。

	幅		長(m)	深さ	方向	重複	確認面	断面形	堆積土	遺物	備考
	上幅	下幅									
SD2	18～25	7～8	2.65以上	7～13	N-22°-W	SD4に切られる	第3層上面	不整逆台形	褐色10YR4/4シルト質粘土	底面より土師器(図29)	住居跡周溝の可能性
SD3	15～25	12～16	2.0〃	1～8	N-7°-E	ピットとの切合不明	〃	〃	暗褐色10YR3/3粘土質シルト		
SD4	20～22	12	1.62	13～14	N-42°-W	〃	〃	〃	－		
SD5	27(最大幅)	17(最大幅)	2.5以上	3～7	N-27°-W	〃	〃	〃	－		
SD6	30	10～15	3.2〃	2～4	N-25°-W	〃	〃	〃	褐色10YR4/4シルト質粘土		住居跡周溝の可能性
SD7	13～18	5～8	1.0〃	1～7	弧状	〃	〃	U字形	にぶい黄褐色10YR4/3(表土に同じ)		
SD8	40～95	20～70	1.95〃	12	N-54°-W	〃	〃	皿型	明黄褐色10YR6/6シルト質粘土		

（単位cm）（検出長）

第4表　溝状遺構観察表

VI. 4～6次調査考察とまとめ

1. 4次調査

8世紀後半頃の竪穴住居跡1軒、平安時代の段切りされた平場1及び掘立柱建物跡1棟、時代不明の溝状遺構2条、ピット22個を検出した。

これらのなかで一括遺物である1号住居跡の暗渠状遺構を構成していた埋設丸瓦（8点）について特にとり上げておきたい。この中で多賀城跡及び関連遺跡の調査による編年と分類に対応するのは本分類のIII類、即ち粘土紐巻き技法による有段丸瓦のみである。この種の丸瓦は多賀城II～IV期の各期に存在し、年代的にも8世紀後半から10世紀まで存在している。

I類は粘土板巻の無段瓦である。多賀城編年のI期に属するI A類の特徴と比較してみると、明瞭な2次叩きを確認できなかったが、凸面には、ていねいなナデもしくはケズリ調整(主に縦位)があり、凹面の一定範囲にツブレが認められるものが3個ある。多賀城編年I A類の中には少数ではあるが凸面を縦位ケズリ調整するものがある(注1)。本遺跡I A類はこれらの特徴から、布を敷かない状態での凸型台を使用している可能性が高い。平成2年度調査の大蓮寺窯跡2号窯には粘土板巻き無段瓦で凸型台圧痕を残す例が一定量ある。(凸面は平行叩き→軽いナデもしくは平行叩き)。このタイプの丸瓦は凹面に凸型台圧痕をもたず、凸面縄叩き→ナデ・ケズリによりスリ消しするタイプの丸瓦とともに、前庭部排水施設を構成している。この2号窯は7世紀末葉～8世紀前葉と考えられている（注2)。

次に燕沢遺跡表採とされている単弁四弁蓮華文軒丸瓦（図31）と比較してみたい。この瓦は圏線などの特徴から多賀城創建に先行する7世紀後葉～8世紀初頭の年代が考えられるものである(注3)。この丸瓦部は凹面に布を敷かない凸型台圧痕を残し、凸面が平行叩きのものである。凸面の平行叩きは二次叩きの可能性もあり、多賀城編年のI A-1b類(二次叩きが平行叩き)に近い特徴をもつ。本遺跡のI類は、多賀城編年のI A-C類（二次叩き→縦位ケズリ）に近い特徴をもつ。従来の調査成果をみると本遺跡1・2・3次調査で一定量出土している。いずれも多賀城跡での出土量は非常に少ないものである。以上のように本遺跡1号住居跡出土丸瓦I類は、多賀城跡I A類と比較して、粘土板巻き無段という共通性をもちつつも異なる点も多い。又、大蓮寺2号窯出土例と比較して近似するが細部の特徴は異なる。この2号窯の丸瓦は長さ37 cm前後のものが多いが、これは本遺跡の30 cmに比較して長い傾向が認められる。前述の表採された燕沢遺跡軒丸瓦の丸瓦部33.5 cm例と合わせて考えてみると、この点で本遺跡I類はやや後出的傾向があるのではないだろうか。

次にII類は粘土紐巻きの無段丸瓦（1点）である。多賀城分類でこれに近いものはII期に属するII b-a類であるが、これは本遺跡例の凸面がロクロナデである点で異なる。

さて、瓦から見た限り竪穴住居跡の暗渠状遺構設営の年代の決定は困難である。出土土器からすると8世紀後半頃の可能性が高い。丸瓦の製作技法においても、粘土紐巻無段という製作技法の特徴はII期にみられるので、各種の丸瓦が暗渠状遺構に使用された年代はこの頃と考えられる。

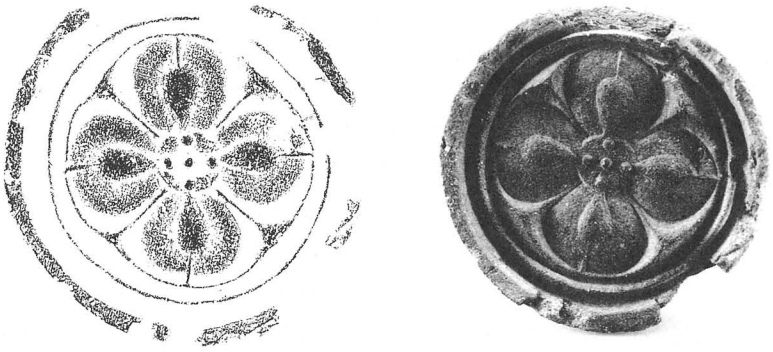


図31　燕沢遺跡出土軒丸瓦（拓図　スケール⅓）

（注1）宮城県多賀城跡調査研究所のご好意で実見させていただいた。

（注2）平成三年度整理途上の見解

（注3）田中則和・篠原信彦「大蓮寺窯跡」『第17回古代城柵官衙遺跡検討会資料』（1991年）

2．5次調査

奈良時代の土坑1基。平安時代の竪穴住居跡2軒・竪穴状遺構1基・土坑1基、時代不明の土坑3基・溝状遺構8基・ピット41個を検出した。

SK2土坑から出土した土師器坏は、国分寺下層式に比定されるもので、燕沢遺跡の調査ではじめて出土したものである。

3．6次調査

古墳時代塩竈式期の竪穴住居跡1軒が、柱穴状ピットと溝状遺構の配置から想定される。又、平安時代の溝状遺構1条、時期不明の土坑2基・溝状遺構5条、ピット69個を検出した。

引用・参考文献

石田茂作　1934　「仏教の初期文化」岩波講座『日本歴史』

伊東信雄　1950　「燕澤古瓦出土地」『仙台市史 3』

　　1970　「燕沢古瓦出土遺跡」『仙台の文化財』

氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯　東北史学会

阿部義平　1968　「東国の土師器と須恵器」『帝塚山考古学』

桑原滋郎　1969　「ロクロ土師器坏について」『歴史』第 39 輯　東北史学会

渡部弘美　1982　『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第 39 集

　　1984　『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第 62 集

結城慎一・中富洋　1988　『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第 116 集

宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所　1980　「多賀城跡政庁跡（図録編）」

　　1982　「多賀城跡政庁跡（本文編）」

進藤秋輝・高野芳宏・渡辺伸行　1975　「多賀城創建瓦の製作技法」『研究紀要Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所

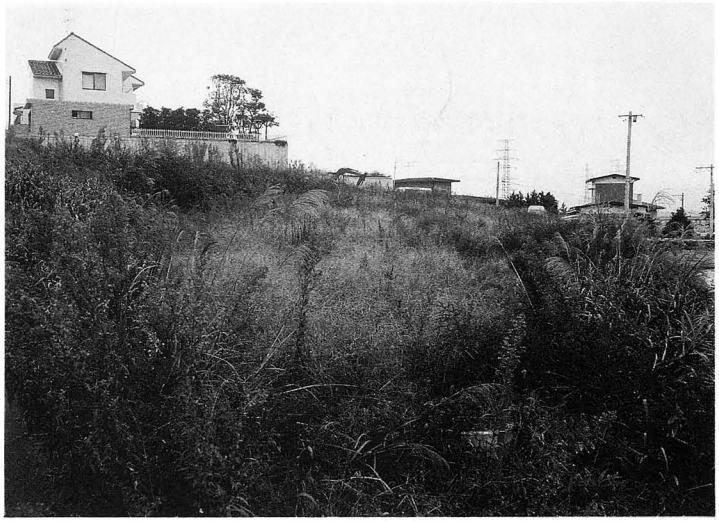
進藤秋輝　1978　「多賀城系古瓦の二系統」『研究紀要Ⅴ』宮城県多賀城跡調査研究所

白鳥良一　1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

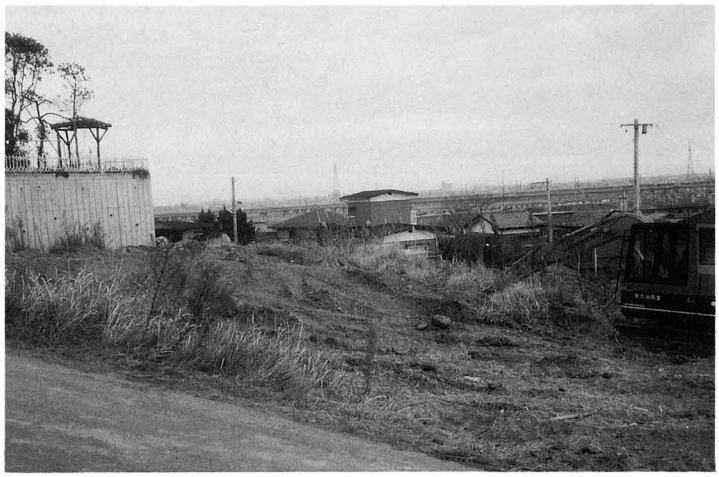
写　真　図　版

写真－1　航空写真　昭和36年撮影

写真－2　航空写真　平成２年撮影



写真－３
４次調査区遠景
（調査前状況）



写真－４
４次調査区近景
（調査前状況）

写真－５
ＳＩ－１　竪穴住居跡

４次調査　遺構写真（１）

写真－6
ＳＩ－１竪穴住居跡
瓦埋設部

写真－7
ＳＩ－１竪穴住居跡
完掘状況

写真－8
ＳＩ－１竪穴住居内
土師器甕埋設部

4次調査遺構写真（2）

写真－９
ＳＩ－１竪穴住居跡　煙道(右)

写真－10　　作業風景(下)

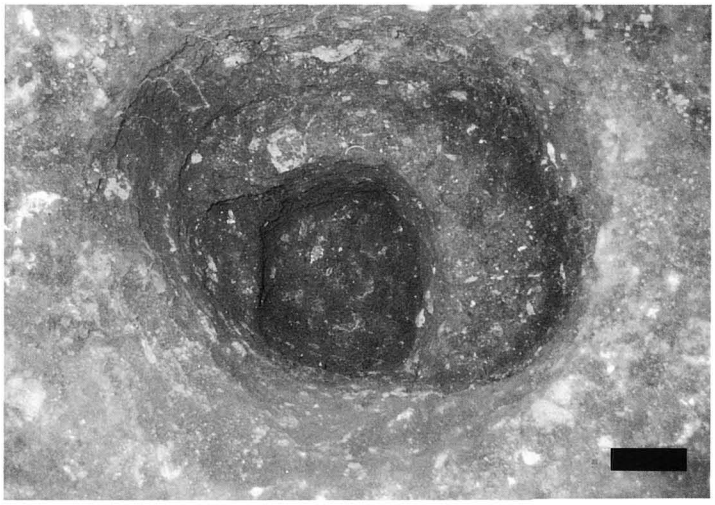
写真－11
ＳＢ－１掘立柱建物跡

写真－12
ＳＢ－１掘立柱建物跡

4次調査遺構写真（3）

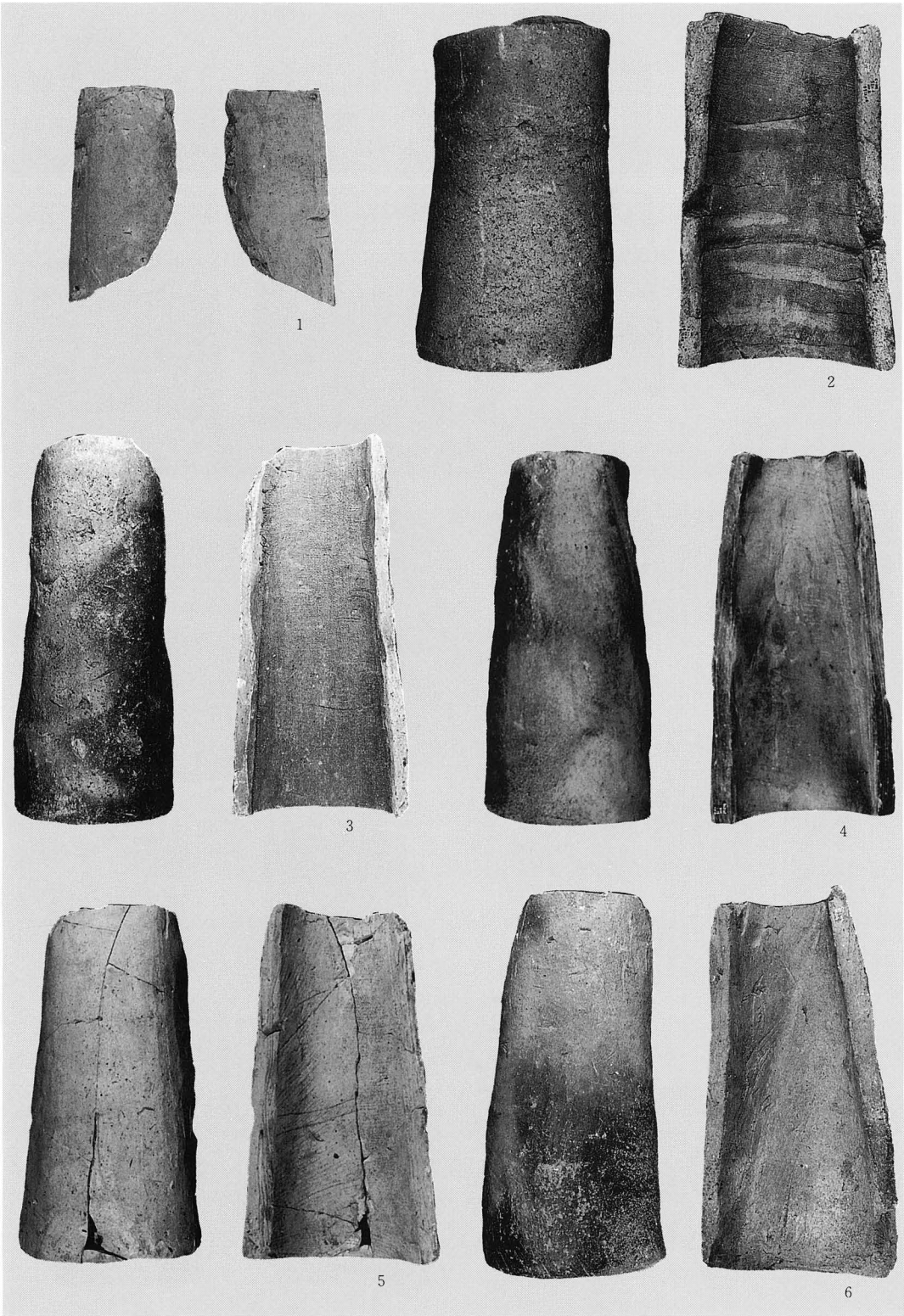
写真―13
ＳＢ―１掘立柱建物跡

写真―14
ＳＸ―１平場瓦出土状況



写真―15
ＳＸ―１平場　柱穴

４次調査遺構写真（４）



写真―16　４次調査ＳＩ１竪穴住居跡埋設瓦

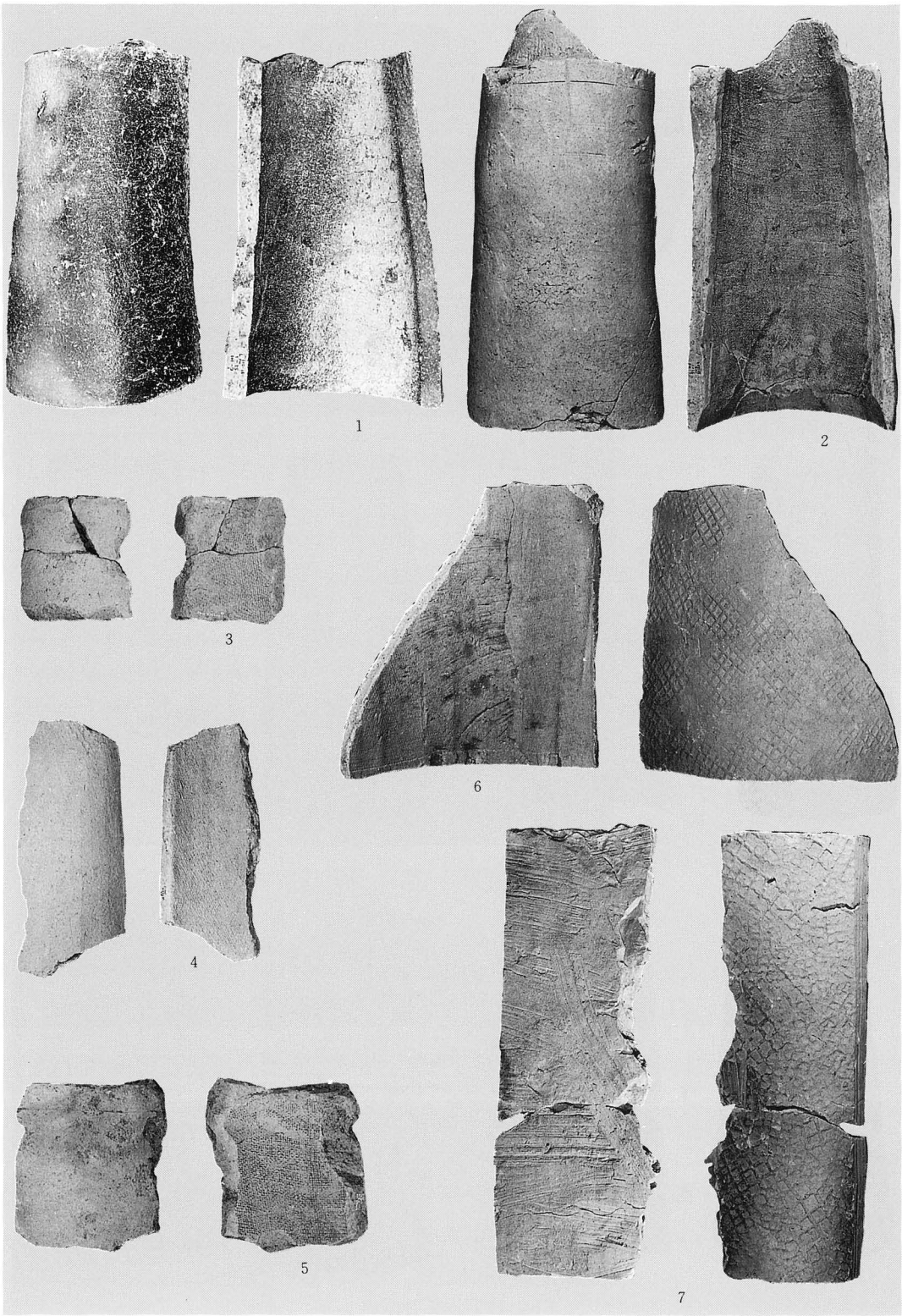
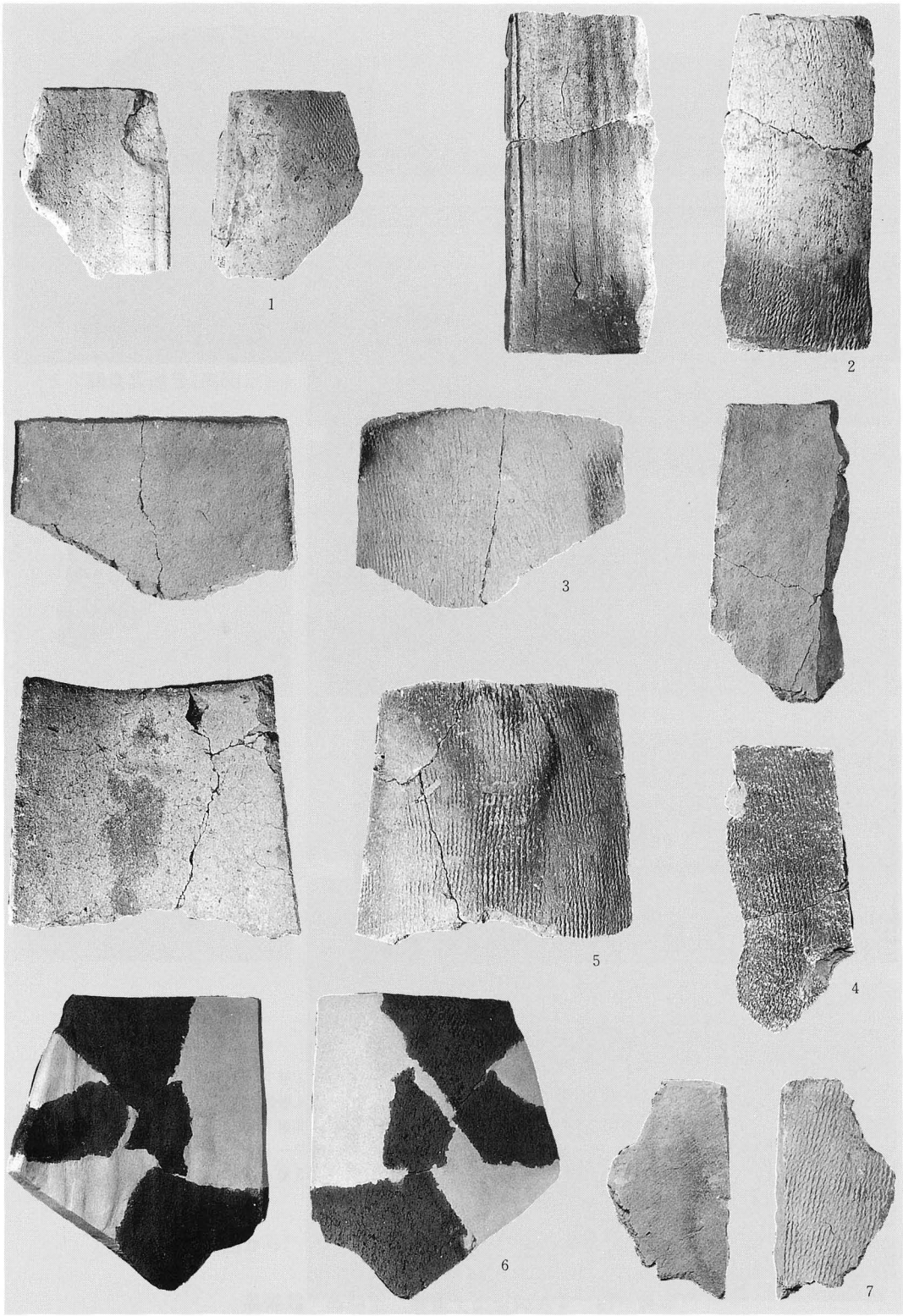
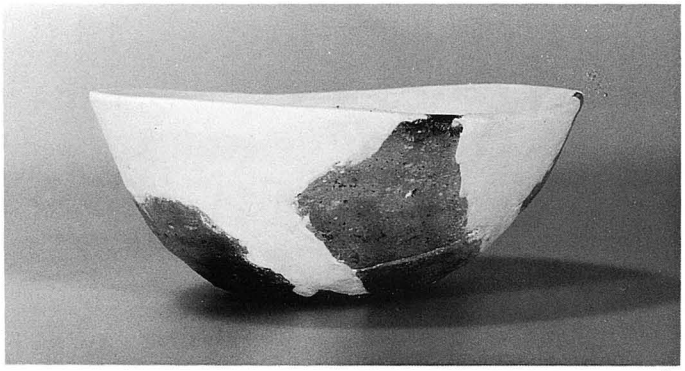


写真17　ＳＩ１竪穴住居跡埋設瓦
ＳＸ１平場・ＳＢ１掘立柱建物跡出土瓦

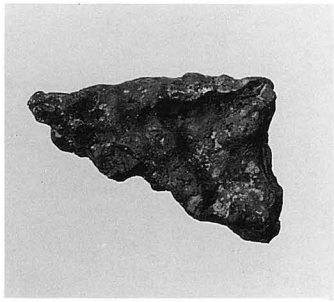


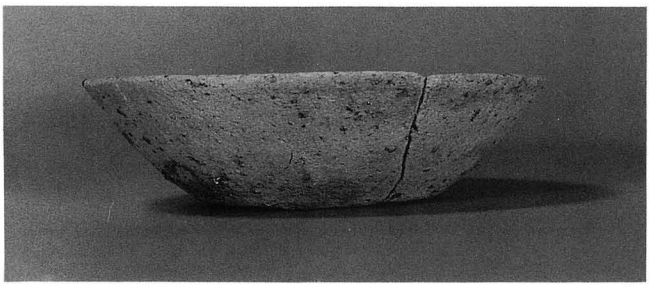
写真—18　ＳＸ１平場・ＳＢ１掘立柱建物跡出土瓦

1

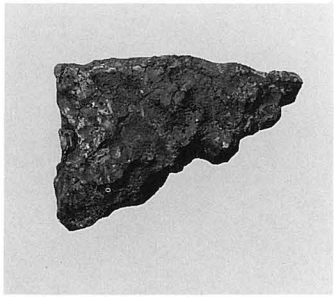


2

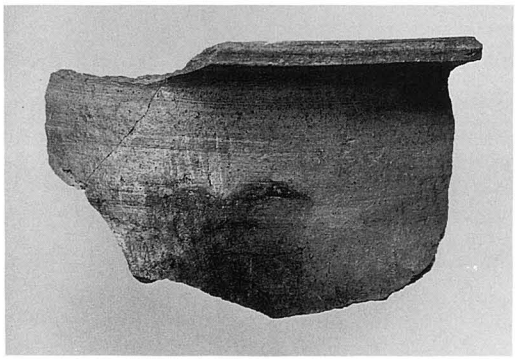




3



5



4

1．ＳＩ１　３層下（図５－１）
2．ＳＢＩ　３層拡ベルト（図10－３）
3．ＳＢＩ　３層下（図10－２）
4．ＳＩＩ　Ｐ－１（図10－１）
5．ＳＢＩ　３層上（鉄製品）

写真―19　４次調査出土遺物　土師器・鉄製品

写真―20
5次調査区遠景(南西から)

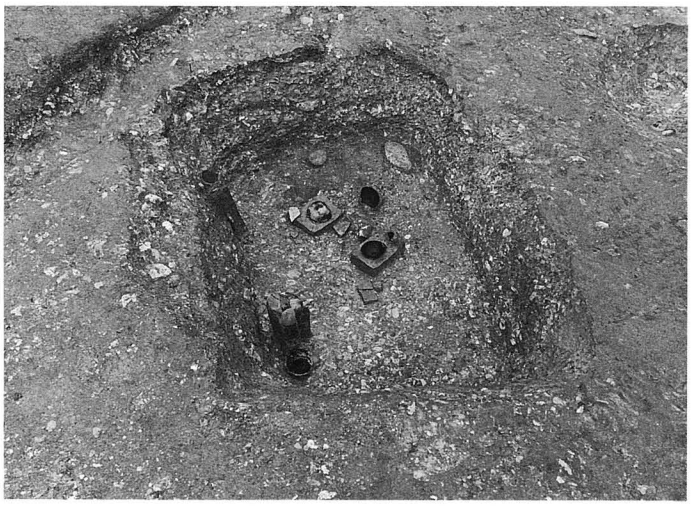
写真―21
調査区全景(東から)

写真―22
調査区全景(西から)

5次調査遺構写真（1）

写真―23
ＳＩ―１竪穴住居跡

写真―24
ＳＩ―２竪穴住居跡



写真―25
ＳＫ―１土坑
土師器坏出土状況

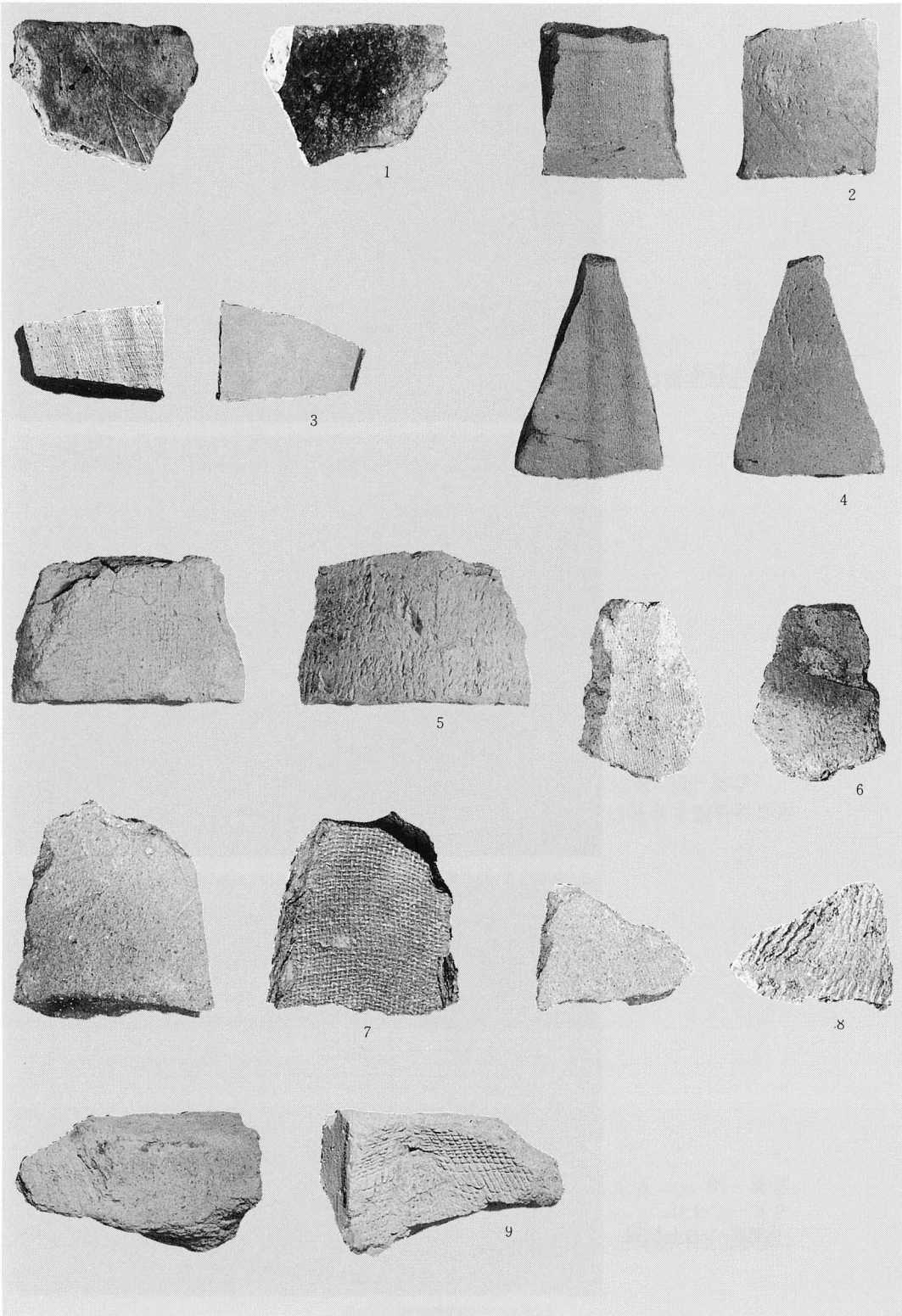
５次調査遺構写真（２）

写真―26
ＳＫ―１土坑完掘状況

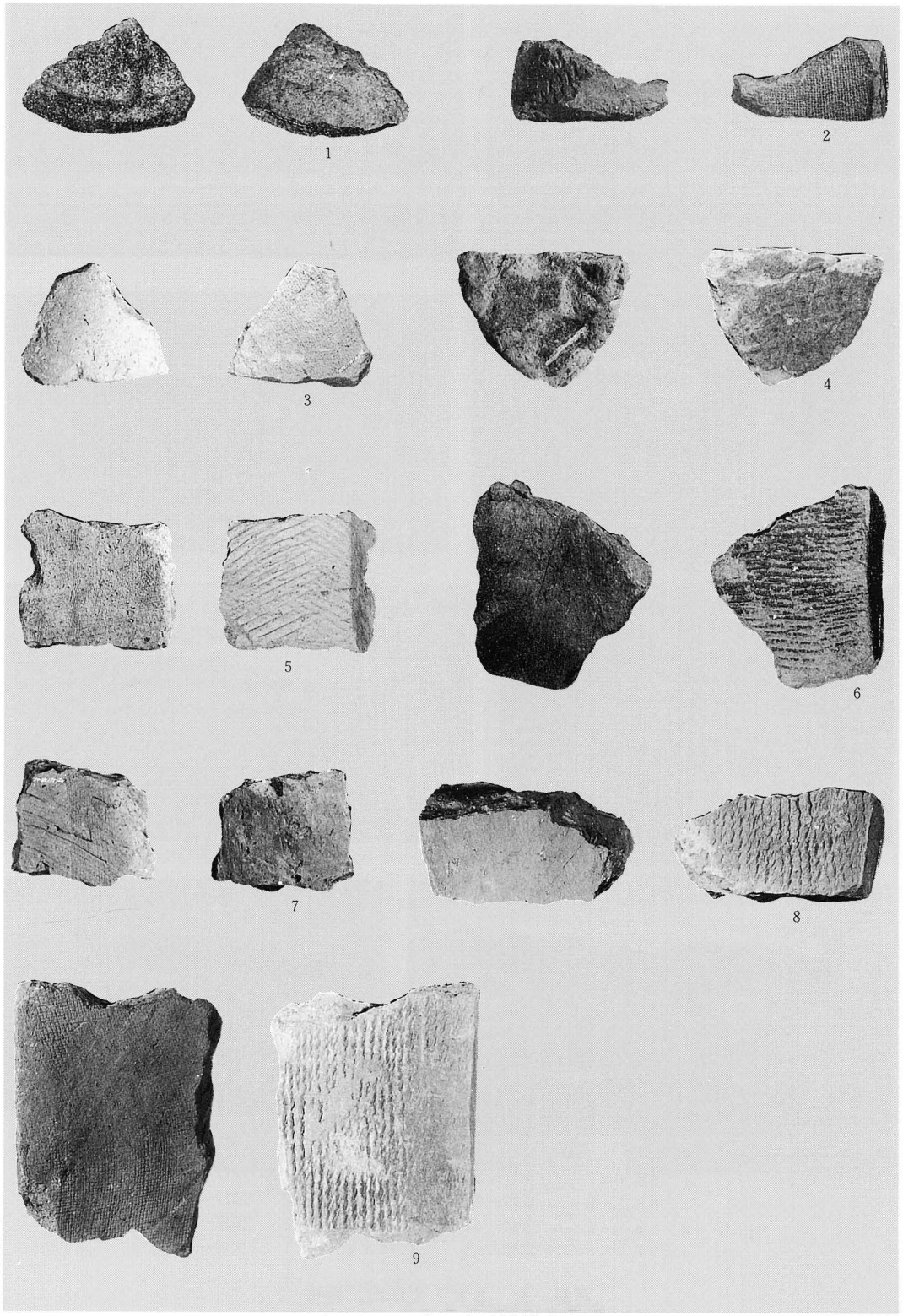
写真―27
ＳＫ―２土坑

写真―28
ＳＫ―２土坑
土師器坏出土状況

５次調査遺構写真（３）

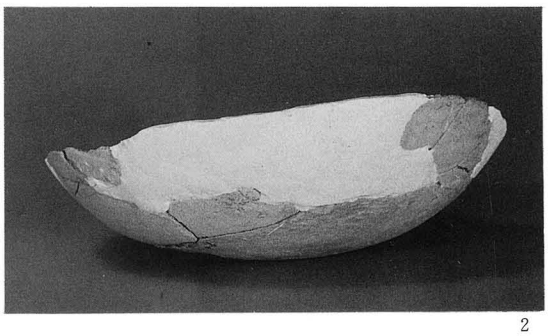


写真―29　ＳＫ１土坑出土瓦



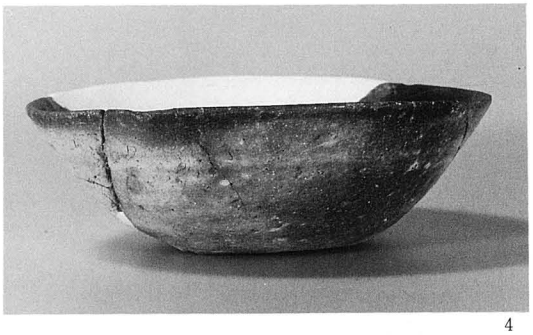
写真—30　5次調査遺構外出土瓦

1

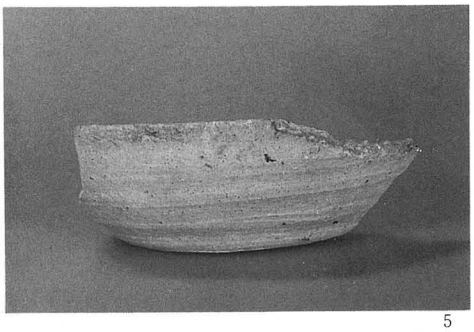


2

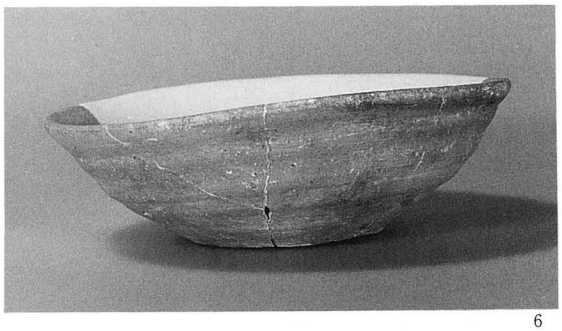
3



4

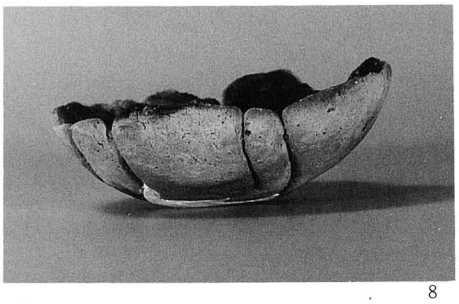


5



6

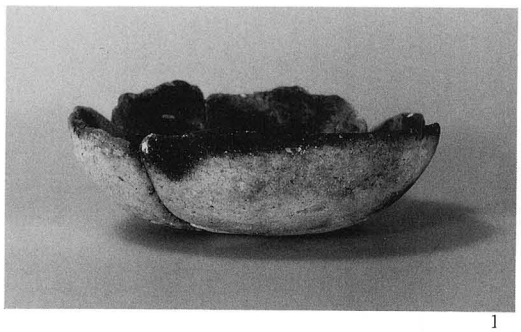
7



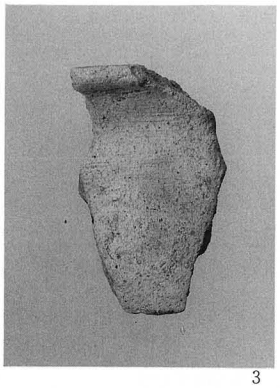
8

1．ＳＫ１・Ｐ－７（図17－３）
2．ＳＫ１・Ｐ－９（図17－７）
3．ＳＫ１・Ｐ－６（図17－４）
4．ＳＫ１・Ｐ－３（図17－６）
5．ＳＫ１．赤焼土器（図17－８）
6．ＳＫ１．須恵器　（図17－９）
7．ＳＫ１．Ｐ－８　（図17－５）
8．ＳＫ２．Ｐ－１　（図19－３）

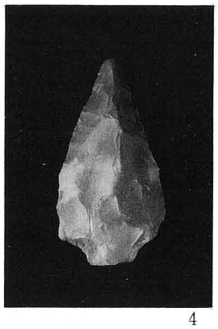
写真―31　ＳＫ１土坑出土遺物



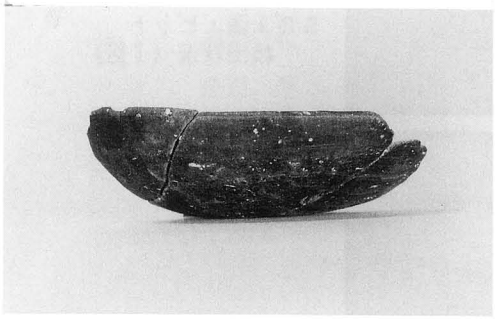
1



3

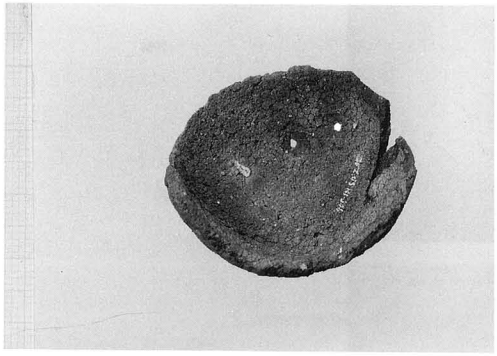


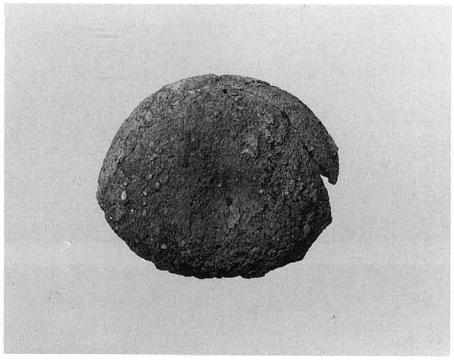
4

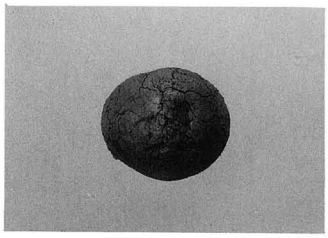


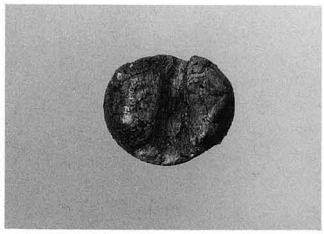
2

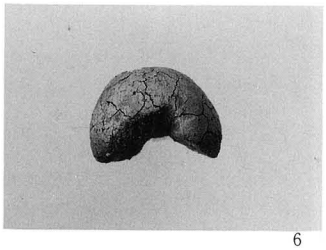
5











6

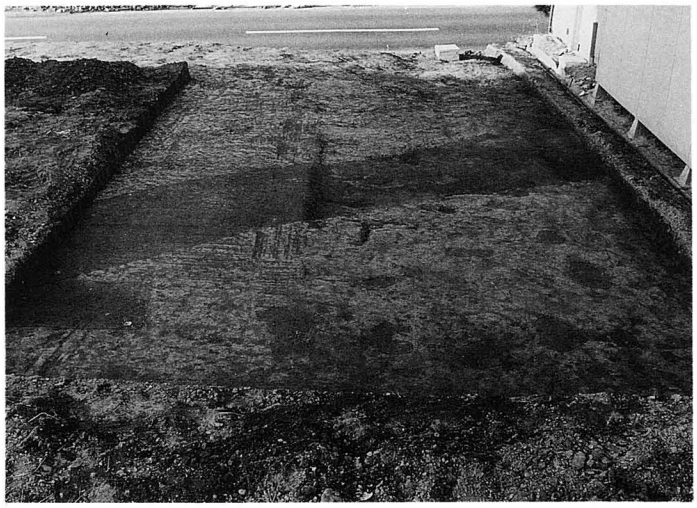
5次調査

1．ＳＫ２　Ｐ－２（図19－２）
2．ＳＫ２　埋土（図19－１）
3．ＳＩ１　Ｐ－１（図14－２）
4．ＳＤ５．№40（図22－２）

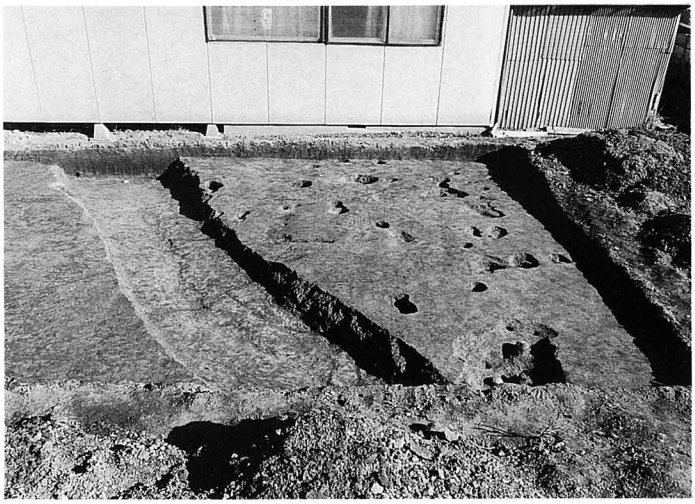
6次調査

5．ＳＤ２（図29）
6．ＳＫ１（図25）

写真―32　５・６次調査出土遺物



写真―33
ＳＤ１溝・ピット
検出状況（Ⅰ区）



写真―34
ＳＤ１溝・ピット
完掘状況

写真―35
竪穴住居跡（Ⅱ区）

文 化 財 課 職 員 録

課　長　　早坂春一

管　理　係

係　長　鴇田義幸

主　事　白幡靖子

〃　　佐藤良文

〃　　高橋三也

〃　　庄司　厚

調査第一係

係　長　佐藤　隆

主　任　田中則和

教　諭　佐藤好一

主　任　篠原信彦

〃　　木村浩二

主　事　金森安孝

〃　　吉岡恭平

〃　　工藤哲司

〃　　斎野裕彦

〃　　長島榮一

〃　　工藤信一郎

〃　　荒井　格

教　諭　五十嵐康洋

〃　　渡辺雄二

主　事　大江美智代

調査第二係

係　長　加藤正範

主　任　熊谷幹男

教　諭　太田昭夫

主　事　佐藤　洋

〃　　佐藤甲二

教　諭　小川淳一

主　事　渡部弘美

〃　　主浜光朗

〃　　中富　洋

〃　　平間亮輔

教　諭　高倉祐一

主　事　佐藤　淳

〃　　渡部　紀

仙台市文化財調査報告書第154集

燕　沢　遺　跡

1 9 9 1 年 3 月

発行　仙 台 市 教 育 委 員 会
仙 台 市 国 分 町 3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱ 東 北 プ リ ン ト
仙台市立町24-24　TEL 263-1166